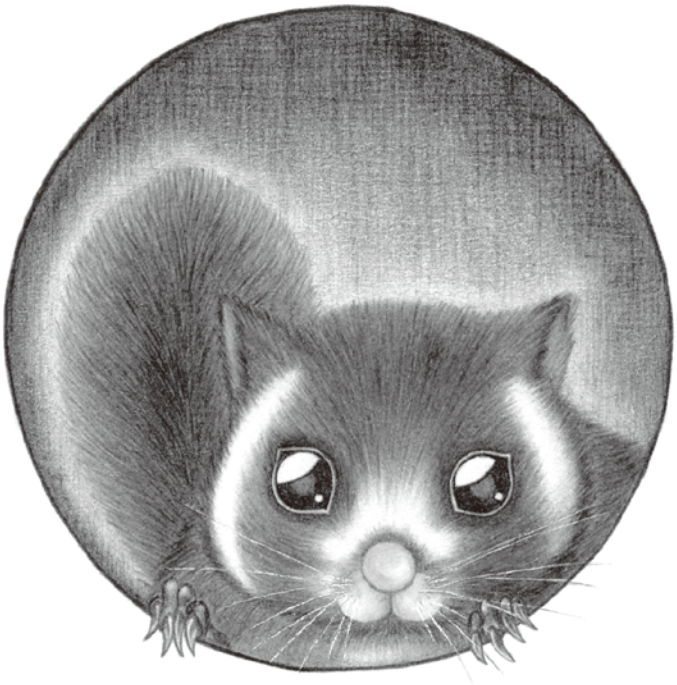
地域交流研究

年報第19号



Aimi. W

都留文科大学地域交流研究センター

2022年度

地 域 交 流 研 究

2022 年度

年報 第 19 号

目　次

― 2022 年度（令和 4 年度）活動報告―

Ⅰ．2022 年度の活動について〔総括〕 …… 2

Ⅱ．各部門の活動 …… 5
　Ⅱ－１．自然共生研究部門
　　Ⅱ－１－１．動物の生態研究と教育・展示活動
　　Ⅱ－１－２．キャンパス内の絶滅危惧植物の保全活動
　　Ⅱ－１－３．水文環境研究と自然に関わる市民公開講座
　　Ⅱ－１－４．谷二（やに）ラボ
　Ⅱ－２．共生教育研究部門
　　Ⅱ－２－１．地域美術教育
　　Ⅱ－２－２．地域インクルーシブ教育
　　Ⅱ－２－３．社会教育
　Ⅱ－３．まちづくり研究部門
　Ⅱ－４．グローカル交流研究部門

Ⅲ．インターフェイスとメディアの活動 …… 33
　Ⅲ－１．第 18 回地域交流研究フォーラムの開催
　Ⅲ－２．各種講座の開催
　　Ⅲ－２－１．都留文科大学現職教員教育講座
　　Ⅲ－２－２．都留文科大学子ども公開講座
　Ⅲ－３．学部共通科目の開講
　　Ⅲ－３－１．「地域交流研究Ⅰ」
　　Ⅲ－３－２．「地域交流研究Ⅱ」
　　Ⅲ－３－３．「地域交流研究Ⅲ」
　　Ⅲ－３－４．「地域交流研究Ⅳ」

Ⅳ．地域貢献活動 …… 51
　Ⅳ－１．山梨県南都留地域教育フォーラム
　Ⅳ－２．都留市放課後子ども教室事業
　Ⅳ－３．文大ボランティアひろば
　Ⅳ－４．地域交流研究センターサテライト
　Ⅳ－５．学級づくりの向上をめざす実践講座
　Ⅳ－６．市民公開講座

Ⅴ．地域交流研究教育プロジェクト …… 64
　Ⅴ－１．食育つる推進プラン

イラスト：渡邉愛美

活 動 報 告

2022 年度

都留文科大学　地域交流研究センター

活　動　報　告

2022 年度（令和 4 年度）

2022 年（令和 4 年）度の活動について【総括】

地域交流研究センター（以下、センターと記す）は、本年度（令和 4 年度）で発足から 20 周年を迎えた。センター発足以前から、都留文科大学では地域との交流や、学生･教職員･市民との協働によるさまざまな実践が行われてきた。さらに先人による地域における諸実践の積み重ねにより、活動に不可欠な人間関係や、じかに自然や文化に触れ学びを深めるフィールドが築かれてきた。教職支援センターに移管された SAT 事業や現在のセンターの多様な諸活動もこのような地道な取組が基盤となっている。

こうした地域での継続的な取組や理念を大学として大切に受け継ぎ発展させていくために、センター発足時に確認した基本的な考え方は次の３点である。

① 大学に対する地域の要請に、本学のもつ諸資源を活かして対応し、「地域の大学」としてその役割を担っていくこと
② 地域性や実践性の問われる本学の研究･教育の一環として、地域（現場）に赴き、「課題」と取り組む地域の人びとと共同して活動を展開すること
③ これらの活動の蓄積を通して、本学も地域づくりに参加し、その一端を担うこと

こうした基本的な考え方は、現在でもセンターの各部門の活動や市民公開講座、地域貢献活動等に反映されている。またセンターが地域のあらゆる要請に対応する単なる「地域交流センター」ではなく、地域との交流のあり方を本学の研究や教育の側面から捉え直し、兼担教員の持ち味を活かした取組を通して地域での交流のあり方を研究する「地域交流研究センター」であることも確認してきた。

本学の研究・教育の特色を活かした地域貢献活動を充実させるために、センターでは、現在、「自然共生研究部門」、「共生教育研究部門」、「まちづくり研究部門」、「グローカル交流研究部門」を置き活動している。当センター発足時に、地域を捉える視点として「自然」、「教育」、「仕事とくらし」をテーマとしたが、その基本的な視点は現在のセンター各部門の活動にも受け継がれている。

2022 年度は、前年度と同様に新型コロナウイルス感染症の影響により、本学の事業実施のガイドラインに照らし合わせたうえで、感染症対策を図り、個々の事業ごとに実施計画を立てるという手順を踏み可能な限り事業を実施した。

まず、「自然共生研究部門」では、ムササビ観察バスツアーや星空講演会、谷村第二小学校放課後実験教室（「谷二ラボ」）を開催し、キャンパス内の絶滅危惧植物の保全や緑化をテーマとした取組も始まっている。

「共生教育研究部門」では、宝保育所と連携した造形表現活動や障がいなど地域のニーズのある人たちの週末の居場所づくりの活動（通称「クロボ」）、新たな試みとして「バンカム、ツル」の 2 階をお借りして中原中也の詩を読み合うなど創作的なワークショップを行なう「つ

るぶんカフェ」の事業などが企画された。

「まちづくり研究部門」ではこれまでも富士山麓電気鉄道線「谷村町駅」において、放課後の子どもたちの居場所づくり「ぷらっとはうす」を実施してきたが、今年度はコロナの影響で3年ぶりに定期的な開催ができた（今年度は33回実施）。また観光ツアープロジェクトでは、富士急行株式会社と都留市と連携し、「都留市のおいしいを巡る旅～ご縁がつなげた人と食～」と題して、市内の暮らしや魅力を体感するマイクロツーリズムを実施した。

「グローカル交流研究部門」でも、これまで新型コロナウイルス感染症の影響で中止となっていた交換留学が再開され、留学生と本学学生との交流をテーマとした「ムササビ観察会」を開催し観察会スタッフ4名、留学生7名、通訳を担当した国際教育学科の学生3名が参加した。

そのほかの事業として、「毎日の生活に役立つ楽しいモノづくり」と題した子ども公開講座や、「英語で遊ぼう」と題した小学生対象の市民公開講座が開催され、大学生と小学生の貴重な交流の場ともなった。ロンドンオリンピックに出場した本学出身の佐野夢加先生による「佐野夢加かけっこ教室」も毎年好評で、今年度は1年生から3年生の親子9組、19名の参加があった。

地域でボランティアをしたいという学生の要望が多い。そのためセンターではまずボランティアを希望する学生に登録をしてもらい、事務局からボランティア募集のお知らせや講座などを随時メールで周知することとした。令和4年度の学生ボランティア登録者は180名であった。またボランティアを通して交流できる場、「文大ボランティアひろば」を月1回、昼休みに開催した。ここでは、地域でボランティア活動をしている方々にも参加していただいている。今後は、地域のボランティアニーズを知る場としてもさらに機能を充実させたい。広報活動については、冊子、SNS、ホームページなどさまざまな媒体を使い幅広い年齢層を対象に活動を展開した。特に本学入学を希望する高校生には、センター活動や本学の魅力を伝えるために見開き4頁の「ニュースレター」を2号発刊し、オープンキャンパスでも配布した。オープンキャンパスでは、センターは『フィールド・ノート』を編集する学生がキャンパスツアーを担当したが、高校生と年齢が近いこともあり、ツアーの途中や終了後も学生生活や大学の様子を相談する光景が見られ、大学の魅力をPRするよい機会となった。キャンパスツアーでの経験がもとで本学への入学を決めたという声も寄せられた。

今後の課題として以下の3点を挙げておきたい。

まず、令和4年度は、都留市複合型居住プロジェクトの大学連携施設の基本設計が始まった。本年度は運営委員会で基本構想について経営企画課から説明があり、センター会議・運営会議で意見を集約し、運営会議で報告、施設整備委員会での承認という手続きを踏み、進めてきた。この施設では、全国各地から集まった学生が、地域での交流を通して、事象や活動に触れ、機械的な暗記とは異なる「生きた学び」を体験し、学びを深めることのできる空間にしたいと考えている。そのために「楽しむ」、「学ぶ」、「つながる」を施設計画のポリシーとした。できる限り多くのご意見をいただきながら、これまでセンターが推進してきた「都留フィールド・ミュージアム」の理念が体現できるような施設を目指したい。

また、これまで共通教育科目群として「地域交流研究Ⅰ～Ⅳ」を開講してきたが、カリキュラム改定にあわせて、センターが主体として開講する副専攻プログラムが令和6年度から始まる。この副専攻は、センターが築き蓄積してきた地域での人間関係やフィールドを基礎と

して、知識だけでなく卒業後の人生に活かせる「生きた学び」の修得を目指している。地域交流のあり方や学びのあり方を問うような魅力ある副専攻を設計していくことが今後の課題となる。

各教員の持ち味を活かした魅力ある事業の展開が期待される一方で、大学認証評価等で高い評価を受けている本学の地域貢献活動は、兼担教員のボランタリーな精神と熱意とによって支えられているという現実もある。「地域の大学」を掲げる本学の地域交流の現実に応じて、兼担教員や学生、職員、市民が参加できる、あるいは参加しやすい環境の整備をしていくことが重要な課題となる。改修工事が終わり令和5年度から供用開始となる6号館（THMC）にもキッチンを備えたラーニング・コモンズができるが、そうした空間を使用しながら活動が自在に展開できることも地域交流の充実という視点から重要であるということをセンターとしても要望していきたい。

最後に、本年度は、20名を越える教員にセンター委員として関わっていただいた。センター委員以外にも市民公開講座等、特色のある事業に多くの学生、教職員、市民のみなさまに参加していただいた。多くのかたがたにセンター活動を支えていただいていることに深くお礼を申し上げたい。

（文責：北垣憲仁）

Ⅱ．各部門の活動

Ⅱ－１．自然共生研究部門

【2022 年度（令和 4 年度）の活動概要】

2003 年の地域交流研究センター（以下「センター」と記す）が発足すると同時に一部門として位置づけられたフィールド・ミュージアム部門は、センターの再編にともない、2019 年度、「自然共生研究部門」と改称した。自然共生研究部門としての活動は 4 年目となる。センターは発足以前から、地域を博物館に見立て地域での事象や活動にじかに触れることで、機械的な暗記とは異なる「生きた学び」、つまり知識や技能を生活の中で活かすことができる学びを体験するという大田堯元学長による「都留自然博物館」や今泉吉晴本学名誉教授による「都留フィールド・ミュージアム」が構想されてきた。こうしたセンター発足以前の構想や諸実践、2003 年以降の取組を受け継ぎながら「自然共生研究部門」では活動をしてきた。2022 年度はこの部門を、北垣憲仁（地域交流研究センター教授）、別宮有紀子（学校教育学科教授）、内山美恵子（学校教育学科教授）、山森美穂（学校教育学科教授）、福島万紀（地域社会学科講師）が担当した。

自然共生研究部門では、教員の専門領域を超えた協働というセンターの特徴を活かし、「地域の自然と暮らし」をテーマに次のような活動に取り組んでいる。

・調査と研究　①動物の生態研究
②水文（すいもん）環境（水循環など）の研究
③地域の農林業の持続に関する研究
④自然と文化の保全活動

・収集と保管　①地域の自然・文化資料の収集と保管

・教育と公開　①自然観察会（ムササビ観察会、湧水観察など）
②キャンパスの緑化活動
③出前講座・公開講座・放課後実験教室
④展示
⑤出版（機関誌『フィールド・ノート』の発行など）

本年報では、2022 年度に取り組んだ事業について担当者ごとに報告する。

Ⅱ－１－１．動物の生態研究と教育・展示活動

１．2022 年度の活動概要

「フィールド・ミュージアム部門」の活動を受け継ぎ、地域の動物の生態研究を基盤に、①自然との共生のあり方を市民との交流事業を通して探ること②学生と市民との交流により地域の自然や文化を記録し保存し発信すること、を活動のおもな目的としている。2022 年度も、新型コロナ感染症の対策として、活動内容や室内使用の制限など本学の感染症対策ガ

イドラインに従って感染症対策を講じながら規模を縮小するなど慎重に活動を実施した。以下にその活動内容を報告する。

2. 活動の状況

（1）機関誌『フィールド・ノート』の編集と発行

学生が主体となり編集・発行する冊子『フィールド・ノート』を年3号発行した。従来は、年4号を発行してきたが、コロナ禍により感染対策を講じながら今年度も年3号を発行できた。この冊子編集は、地域交流研究センターの機関誌に位置づけられている活動で、2002年に創刊し2018年に第100号発行を迎えた。2022年度も学科・学年の枠をこえて15名の学生がこの冊子編集作業に参加した。

参加する学生は、自ら記事の企画をたて、実際に地域に出て観察や取材をし、記事を書き、レイアウト、入稿など一連の編集作業を行なう。毎週定期的に開催する編集会議（平日の6時限に設定）でそれぞれの記事を校正しあい、課題を解決しながら冊子を完成させる。地域はもとより全国からの購読の要望があるため、2022年度は各号1000部を発行し（昨年度までは800部の発行）、本学の教職員、学生、市民、全国の希望する読者に届けている。

2022年度の発行状況は次の通りである。

111号：2022年7月発行、3,500部（オープンキャンパス用に2,500部増刷）
　　特集タイトルは「食材」
112号：2022年12月発行、1,000部
　　特集タイトルは「五感で楽しむ」
113号：2023年3月発行、1,000部
　　特集タイトルは「巡る」

また、編集部の学生は、5月15日（日）、8月6日（土）・7日（日）に開催されたオープンキャンパスにおいて、キャンパスツアーの担当として参加した。このオープンキャンパスで『フィールド・ノート』を見て編集に興味をもち、入学後、編集部に入った学生もいる。年齢的にも近いということもあり、キャンパスツアー終了後も、大学での生活や下宿生活の様子などを質問する高校生の姿が多く見られた。

地域の自然や人の暮らしをじかに観察し、取材をして記事にするという『フィールド・ノート』の一連の編集作業には、ただ冊子を発行するだけでなく、言語化が難しい体験と座学で学ぶ学問との往還を繰り返すことでの学びの深化が期待できる。こうしたフィールド・ワークが地域で可能となるのも長い時間をかけて教職員、学生が築いてきた市民との人間関係や信頼関係、人的なネットワークがあるからである。

読者からは次のような感想が寄せられた（一部を紹介）

□毎回、『フィールド・ノート』を愛読しています。大学生の視点で都留の文化・歴史・自然環境を紹介され大変楽しみでファイルに大事に保存しています。
□このような活動をされている学生さんがいらっしゃるのは素晴らしいと思っています。
□50年以上都留市に住んでいますが、知らない事の多さに驚いています。
□都留市のことがよくわかり、発見もあり、楽しみに読ませてもらっています。
□皆様の編集技術の向上を頼もしく感じながら読ませていただいています。

□「外の目」で都留市の自然や人びとの営みをつぶさに取材してまとめた内容は、同じく都留市外出身の私にとってもある意味新鮮であり多くを学ばせていただいています。
□都心では関心の持てる自然はあまりありませんし、人びとの生き方の記事は滅多に見ません。都留に来て、こういう生き方をしている人がいるのだとか、こんなお店があるのかとか、この冊子を読んで、周囲の山や田畑の中を歩いて、鳥や昆虫などいろいろな動物に出会い、また植物を見つけては、これは前に掲載されていたものだなと思ったりして、都留に対して関心がどんどん深くなってきています。
□一人で読むにはもったいないので、ほかの人にもまわしています。
□私が住む場所にはほとんど緑がありませんが、毎年、春にはヤマブキソウやバイカモの花見に都留方面へ出かけるたび、都留文大の地元と思いを巡らせています。
□娘がオープンキャンパスで購読申し込みをさせていただきました。その娘は望みが叶い、今、都留大でがんばっています。『フィールド・ノート』を通して、娘のすごす遠い町のことを知る事ができ、娘のいないさびしさをまぎらせ、また都留市に行くときの楽しみを見つけることができ、とても楽しく読ませていただいています。

（2） ムササビ観察バスツアー

ムササビは身近な哺乳類でもあり、ほぼ定刻（日没後３０分ほど）に活動を開始することなどから観察会の入門としても適している。赤いセロファンを付けることでムササビに眩しさを感じさせないようにしてできる限り自然な暮らしの様子を観察しようと工夫したのが本学の今泉吉晴名誉教授である。対象となる動物に干渉せず、お互いの暮らしを尊重しながら観察するというそのスタイルを受け継ぎ、ムササビの観察をとおして地域の自然の魅力や共生のあり方を探ろうというのがこの観察会の目的である。都留市の今宮神社をフィールドとし、氏子総代とも連絡をとり日程を決め、開催した。例年、現地までの交通の安全性を考慮しバスで移動するスタイルで実施している。

この観察会では、本学の環境 ESD プログラムを受講する学生の実習を受け入れている。2022 年度の実習生の受け入れは 8 名で、事前準備とムササビ観察会の開催など 45 時間の実習を実施した。

なお、2022 年度はコロナ禍での対策として受け入れ人数を制限しながらも、予定していた 6 回の観察会を開催した。
開催日は次の通りである。

① 2022 年 7 月 23 日（水）
② 2022 年 7 月 27 日（土）
③ 2022 年 10 月 15 日（土）
④ 2022 年 10 月 22 日（土）
⑤ 2022 年 11 月 12 日（土）
⑥ 2022 年 11 月 19 日（土）

参加者からは次のような感想が寄せられた（抜粋）
□ふだん何かを観察するために目を凝らしたり、耳を澄ませたりすることがほとんどないのでとても楽しい経験になりました。楽しい観察会をありがとうございました。
□ムササビが出現するまでの時間が、喧噪からは程遠くまさに大自然に身を置いたような感覚でした。

□貴重な体験をさせていただきありがとうございました。また機会があればぜひ参加したいと思います。ムササビのような野生動物と共存できている都留市はとてもよい環境だと思いました。

□かなり近くに住んでいるんだなあと感じました。また機会があれば参加させていただきます。事前の説明も分かりやすく、ムササビについて知ることができました。ありがとうございました。

□とてもわかりやすかった。行く前に糞を見せてくださったので、神社でもすぐに見つけることができました。嬉しかった。学生さんがみなさんていねいに対応してくださり嬉しかったです。

（3） 都留文科大学附属小学校など地域の小学校への授業参加

学校林や学校に隣接する森をフィールドとし、地域の自然を観察し親しむことを目的とする理科授業を行った。小学校における授業は次の通りである。

①都留文科大学附属小学校：3 年生、4 年生を対象とした理科授業（2022 年 10 月 30 日、10 月 17 日、10 月 31 日【3 年生対象学校林探索】12 月 2 日、12 月 13 日）

②上野原市立島田小学校：3・4 年生を対象とした理科授業（2022 年 11 月 8 日）

（4） 富士急行駅舎を活用した展示活動

2022 年度も、富士急行線都留文科大学前駅の駅舎を博物館の分館と位置づけ、展示活動を行った。地域交流研究センターおよび自然共生研究部門の活動を広報し、交流の輪を広げることが目的である。駅舎では、キャンパス周辺の自然をテーマとし、『フィールド･ノート』で掲載した写真を中心に展示を行なった。

本学の華道サークルも生け花を定期的に展示しており、駅舎の利用者にも好評であった。

３． 2022 年度の活動予定

今年度は、当初予定していた活動をほぼ予定通り実施することができた。「自然共生研究部門」では、今後もそれぞれの教員の持ち味を活かしながら事業を展開し、領域を超えた協働による事業にも取り組みたい。

2022 年度、北垣が担当する取り組みとしては次のような事業を計画している。

１．機関誌『フィールド・ノート』の編集・発行
２．環境 ESD プログラムと連携した「ムササビ観察バスツアー」の開催
３．地域の小学校の授業への参加
４．富士急行線駅舎を活用した展示活動

上記の１～４の事業を通して、地域の自然や文化を保存するだけでなく、立場を異にするさまざまな人びとが集い、相互の交流・啓発を深めるなかで地域の文化や自然を創造的に継承していけるような仕組みを整えていきたい。また、令和７年度の供用を予定する複合型居住プロジェクトにおける大学連携施設の基本設計も始まった。センターが推進する「都留フィールド・ミュージアム」の諸実践や理念を体現するような施設になるようセンターに関わるすべての教職員、学生、市民の意見をいただきながら進めていきたい。

（文責：北垣憲仁）

Ⅱ－１－２．キャンパス内の絶滅危惧植物の保全活動

１. 令和４年度の活動の概要

本学キャンパス内には絶滅危惧植物が多数生育している。これらの植物を保全し、学生や教職員（将来的には地域住民も含める）が絶滅危惧植物の生態や、植物と環境との関係について学び･親しめる植物園や緑地を整備することを目的とする。またこれらの活動に加えて、自然や植物を生かした生活の知恵を学んだり､料理･工作等の体験をおこなう。本活動は､様々な世代や学年・多様なバックグラウンドを有する人々が、共に活動・交流し、自然や植物に親しみ、楽しみながら学ぶことを通して、横断的・複合的な学びの在り方や、理論と実践の往還による学びの在り方について実験的に探究するものである。活動メンバーは、別宮有紀子（学校教育学科教員）と、学校教育学科学生９人、地域社会学科学生３人、程原めぐみ（自然科学棟事務職員)、吉田福子（自然科学棟清掃員）の計 15 人で、主な活動の場所を自然科学棟の緑地とした。

２．活動の状況

令和３年度の自然科学棟の外構工事によって、中庭のケヤキの大木が伐採され、環境条件が大きく変化した。そのためまず、光環境・土壌水分環境の調査をおこなった。調査結果に応じて、どの場所に何を移植するかの検討をおこなった。その後、絶滅危惧植物（カワラナデシコ）の発芽実験と播種、カタクリやエビネ、チゴユリ等の絶滅危惧植物の移植を順次実施し､１ヵ月に１度の定期的な除草をおこなった。また､野生の果実（梅、カリン、ヤマグワ）を利用した天然酵母の培養とパン作り、自然の素材（マツボックリや針葉樹等）を利用したクリスマスリースの作成、ドクダミを乾燥させたドクダミ茶の作成もおこなった。

いずれの活動も、それぞれがただの作業で終わるのではなく、生物学・植物学・生態学的な背景的知識等を織り交ぜながら､学びに結びつくような実施内容を心掛けた。学生たちは、この活動の中で職員との交流を深め、地域の食文化や自然についても体験的に学ぶことができる良い機会となっていた。

表１．2022 年度の活動内容と参加人数

日　程	活動内容（基本的に木曜日の８～９時と昼休みに実施）	参加者の人数
４月21日	自然科学棟中庭の環境調査	８人
５月12日	自然科学棟中庭への絶滅危惧植物の播種	８人
６月２日	自然科学棟中庭の絶滅危惧植物の紹介プレートの作成と除草	９人
６月16日	絶滅危惧植物の移植と除草	９人
６月30日	除草とドクダミ茶の作成	９人
７月７日	天然酵母でパン作り	９人
７月28日	除草	６人
12月15日	学内の植物を使ったクリスマスリースの作成	９人
１月19日	チューリップの植付と焼き芋	９人

図１．各活動での参加者の様子

３. 令和５年度の活動予定

令和５年度は、活動範囲を自然科学棟だけでなく、学内の緑地全体の保全活動に取組むことを目標とする。R4 年度までと同様に、ただ作業をおこなうのではなく、その植物の特徴や、周囲の環境や他の生きものとの関係性なども含めて生態系としての見かた、考え方に基づく保全活動を展開したい。また、生きものとの関わり方、調べ方、利用の仕方等も参加者と一緒に学び・共有し、共感の輪を広げていく予定である。そのためにも、様々な学科の学生に幅広く参加を呼び掛け、また学内の保全すべき植物の掲示や案内板の整備等もおこなう。

（文責：別宮有紀子）

Ⅱ－１－３．水文環境研究と自然に関わる市民公開講座

１．令和４年度の活動概要

本事業は都留市の人々や動植物の暮らしに関わりの深い水文環境について、地層と地下水流動の関連性に関する研究や、湧水や水循環に関して都留市民との情報交流することを目的としている。研究対象エリアは東桂地区を主眼に置き、湧水量や地下水位変動などのデータの収集、およびその解析を行っている。市民公開講座は市民の都留市における自然への関心を高め、知的欲求を満たすことが目的である。令和４年度は十分な感染症対策の元に３本の講座を実施した。以下にその詳細を述べる。

２．活動の状況

（１）都留市十日市場・夏狩地域の湧水調査研究

都留市は富士山頂から直線距離で約 25km であるが、調査地域には古富士火山が山体崩壊して桂川の河谷に流れ込んで形成された古富士泥流堆積物の上に、新富士火山初期の活動期に噴出した猿橋溶岩と桂溶岩の２層が分布している。都留市が利用する富士山からの湧水は、後者の桂溶岩中を流動した地下水がその末端崖より湧出している。この湧水に関して、十日市場の永寿院の敷地を借用して、2015 年度から継続して湧水量と水温の観測を実施している。湧水量の観測は、湧水が集まった小水路に自記水位計 S&DLmini（OYO 株式会社製）を設置して１回 / 時間の連続水位を観測し、流量観測結果を解析して得られたＨ－Ｑカーブ（水位と流量との関係式）を用いて水位を流量に換算して湧水量とした。2022 年１月から 12 月までの観測結果は以下のとおりである。

湧水量は約 440 ～ 1130m3/day の間で変化した。2022 年の湧水量は、平均的に 500 ～ 600m3/day 程度で安定していたが、11 月に入って湧水量が増加し、12 月末まで 1100m3/day 程度の湧水量が継続した。現地には１回／月の頻度で観測データの回収に足を運んでいるが，11 月と 12 月は水路への落ち葉が大変多い状況が確認されたため，その影響について検討する必要がある。水温については、これまでの観測結果と同様に、最高および最低水温のピークがおよそ３ヶ月程度気温の変化よりずれており、12.4 ～ 15.0℃の範囲で変化した。近年，継続して最高水温が上昇しているため，今後の計測でも注視していく必要がある。

（２）都留市内の地下水位モニタリング

都留市では市民の水道水源でもある地下水を保全する目的で、2018 年 10 月に地下水保全条例を制定した。地下水位の経年変化を把握し、地下水賦存量解析などの基礎資料を得るために、桂町（異なる深度２本）、十日市場、法能、禾生、鹿留、大幡、朝日馬場の市内７地点に８本の地下水位観測井を設け、2019 年４月よりモニタリングをしており、本学ではその結果の監修をしている。また、それとは別に２本の地下水位観測孔が十日市場に２本あり、共同研究として地下水位観測を実施している。2021 年の結果は都留市地域環境課によりホームページ（https://www.city.tsuru.yamanashi.jp/soshiki/chiikikankyou/kankyouseisaku_t/9990.html）で公表されているので参照されたい。

（３）市民公開講座

令和４年度は、３講座を開催した。いずれも、新型コロナウィルス対策本部の事前審査を受けて実施した。講座実施にあたっては、感染症防止対策として完全事前申込制を採用し、

開催前に体調不良時の参加中止の呼びかけなど、参加にあたっての注意事項の連絡や、万一に備えて参加者の詳細な連絡先を把握しての開催とした。当日の対策としては、受付時の体温測定、手指消毒、マスクの着用、室内の十分な換気、参加者同士の距離の確保、他、を実施した結果、感染症に関する問題は発生しなかった。以下に各講座の詳細を述べる。

＜1. 湧水さんぽ＞

・日時：2022 年 7 月 9 日（土） 9:10 ～ 13:00
・講師：内山美恵子（都留文科大学教養学部学校教育学科　教授）
・場所：都留市夏狩～十日市場
・参加者数：7 名（一般市民 3 名，本学学生 4 名），スタッフ 2 名

本学周辺は環境省の平成名水百選「十日市場・夏狩湧水群」に選定されているが，地元住民にはご存じない方もいる。自分の住む地域の自然に関心を持っていただくことを目的として，例年，大学教員の解説を聞きながら湧水を見て歩く「湧水さんぽ」を実施している。本年は冷たい清水で育つバイカモ（梅花藻）の開花をねらってこの時期に設定したが，連日の暑さのためか残念ながら参加者は少なめだった。しかし，かえってのんびり和気あいあいとした行事となった。
以下は、参加者の感想である。

【感想】

★湧水を意識して観たことがありませんでしたので、今日の会よかったです。長い時間をかけて湧き出した水は触れると冷たく、星と同じロマンを感じました。　★都留市内の湧水ということで、都留市に住んでいる身としてとても身近に感じ興味がわいた。なかなか湧水を見る、触れることのできる機会はないので良い講座だと思った。　★山梨にずっと住んでいたけれど、こんなに湧水があったなんて知らなかったので今回たくさん知れ、実際に見ることができてとても良い経験になった。湧水のことだけでなく、地域の歴史や伝説も聞けておもしろかった。私は歴史とかに興味があるので今回いろんな話がきけて楽しかった。　★自分の地元とは異なる自然と直で触れあうことができてとても楽しかったです！普段私が自分ではなかなか行けない場所に行くことで、新たな発見がたくさんありました。都留の自然にとても興味がわいたので、このような講座がたくさんあるとうれしいです。ありがとうございました。（以上，本学学生）　★ふだんなにげなく見ていた景色を、様々な説明をふまえながら今日、さんさくできて、見識を深める事ができありがとうございました。何もない都留だと思ってましたが少し興味がわきました。　★身近に、こんなにたくさんの湧水が出ているのにおどろきました。(火山溶岩と) でい流の間から出ている事を学んだり出来て良かったです。太郎・次郎滝は自然を特に感じられ美しかったです。　★準備お疲れさまでした。楽しい内容と涼しい場所でよかったです。一言いえば、移動距離が長いので、途中でワンポイント説明があると良いかと思いました。（以上，一般市民）

＜2. 星空講演会＞

・日時：第 1 回　2022 年 9 月 29 日（木）17：45 ～ 20：45,
　　第 2 回　2022 年 12 月 17 日（土）16：30 ～ 19：30
・講師：古荘玲子（都留文科大学，国立天文台）(敬称略)

・場所：都留文科大学　自然科学棟天文台・S6 教室
・参加者数：第 1 回　12 名（本学学生 7 名，教職員 1 名，一般市民 4 名）
　　第 2 回　12 名（本学学生 5 名，教職員 1 名，一般市民 6 名）

本年度は 2 回，観察会を予定した。第 1 回目は月・土星・木星を，第 2 回目は土星・木星を観望する予定であった。しかし，残念なことに 2 回とも天候に恵まれず , 講演会と天文台見学会に変更した。参加証として，本学天文台をデザインした缶バッジ，星空の絵はがき（フィールドノート　vol.111 表紙），フィールドミュージアムエコバッグを配布した。本学は桂川の谷の中に位置するため，夜の早い時期は曇の出ることが多いが，参加者の意見より期待度が大変高いことが判るので，今後も諦めずに行事予定を組んでいきたい。

以下は、参加者の感想である。

【感想】（原文のまま）

＜第 1 回目＞

★とても興味深い内容でした。自分でも天体を少し勉強して見たいと思います。ありがとうございました。　★理系高校出身でとても興味がある内容だったので聞いていて楽しかった。難しい話もあったが宇宙は謎深くて面白いから好き。今度は星が観察できると嬉しい。　★少々難しい部分もあったが、高校では地学をとることができなかったので、こういった話は新鮮でおもしろかった。望遠鏡はかっこよくて圧倒された。貴重な経験ができてありがたいと思った。　★とても楽しかった。　★天体に触れたのは高校の地学以来なので非常に聞いていて楽しかった。望遠鏡で実際に星を見てみたかったが、こうやって専門家の人に来てもらって彗星の話を聞けたのは非常に良い機会だったのでまた聞きたい。　★普段学生として専攻している分野と離れた内容だったので、理解できるか不安でしたが、身近な例や柔らかい表現を使って説明してくださったので、とてもわかりやすかったです。（以上，本学学生）★大学にある展望台に初めて入りました。なかなかこういう機会はないので、貴重な時間でした。観察が出来なかったのは残念でした。　★実際の星空観望ができなかった事は残なんですが、先生のお話が大変面白く水生にも興味が持てたことは貴重な経験でした。　★想像していたのとレベルが違い、ほとんど理解できません。望遠鏡が見られてよかった。終わり近くの話は参考になりました。（月食）　★古荘先生のお話しは、1、2 年前に本校で聞いたことがあり、心がわくわくしてきます。でも今日は木製が見られなくてとても残念。望遠鏡が見られたのはラッキー！東京にいたもう少し若い時に、彗星が観察できる記事を見ると、夜中に出かけたりしていましたが都留に来てからは、まだ見ていません。流星も見ていないのです。今日のお話の中で彗星の駒と小野ことをもう少しこまかく知りたかったです。天体の好きな７８歳の老人より（以上，一般市民）

＜第 2 回＞

★星を観察できるのを楽しみにしていたので残念でした。　★星が見れなくて残念でした！望遠鏡の仕組みなどを知れたのは面白かったです！　★残念ながら星空を観察することはできなかったが、望遠鏡の話や惑星の話を聞けてとても面白かった。火星に生命がいた時期があるという話は、題材にした漫画もあって若干聞いたことはあった。しかし、「確実にある」と言われて宇宙の生命についてロマンが尽きないと思った。そこまで宇宙に詳しくなく、興味本位で参加したがとても面白かった。　★先生からわかりやすく説明してくれました、星

が観察出来ないのが残念ですが、初めてそんなにデカい望遠鏡を見ました、良かったと思います。流星群に関することも知れて、面白いです。機会があればまだ星を見てみたいです。（以上，本学学生）　★子どもと一緒に参加しました。望遠鏡での観測はできませんでしたが天文台に行くことが出来て良い機会となりました。望遠鏡や星の説明についても大変興味深く聞かせてもらいました。子どもには難しい内容でしたが、スタッフの方が飽きないように本を貸してくださったりと、とてもありがたかったです。ありがとうございました！　★知識に乏しい状態での参加でしたが、金星って満ち欠けするんだ、から望遠鏡の細かな分類まで、多くの新しい世界に触れることができ、大変興味深かった　★星の観察はできませんでしたが、星についていませんまで知らなかったことが分かりこれから夜空を興味を持って観てみたいと思います。　★丁寧な講義でわかりやすかったです。実際の惑星を見たかったです。次回に期待します。　★天候により観察できなかったのは残念だったが、望遠鏡についてや惑星についての講演がたいへん興味深く楽しかったです。天文台が気になっていたので、見学できたのも良かったです。（以上, 一般市民）　★ぼう遠きょうを見るのが初めてだったから、楽しかった。（市内小学生）

３．令和５年度の活動予定

（１）都留市を流れる水文環境に関する研究の実施

引き続き，東桂地区の湧水データの収集を実施する。

（２）市民公開講座

令和５年度は，秋など季節の良い時期に十日市場・夏狩湧水群の野外見学を実施する。また、専門家を講師に迎えての星空講演会ならびに自然科学棟天文台を利用しての星空観察は大変好評であるため、来年度も２回実施する予定である。

（３）都留市の水環境理解促進のための展示準備

都留市の大地について，触れる展示などについて、取り組む予定である。

（文責：内山美恵子）

Ⅱ－１－４．谷二（やに）ラボ

谷村第二小学校での放課後実験教室は平成 23 年度から実施しているが、令和４年度より自然共生研究部門の事業と位置付けられた。目的は当初より、①小中学校教員をめざす学生が指導的立場で小学生とともに実験をする経験を積むこと、②学生が実験内容の選定から安全な実験教室の運営までを行う経験を積むこと、③学生の自然科学の素養を高めること、④理科実験教室への参加が子どもの理科への興味を高める効果を検討することとしている。幸いなことに、継続して学校から実施を受け入れていただいている。

【令和４年度の報告】

感染防止の観点から、１教室での参加人数を 20 名以内とし、２教室で最大 40 名という設定とした。

第１回（６月２２日）は、「ふしぎなお絵かき：無色とうめいの水でかいたのに？」と題し、あらかじめ BTB 溶液に浸して乾燥させた画用紙に、無色透明の弱アルカリ性の液を筆につけて紙に描いてみるという活動を行った。BTB 液は、弱酸性では黄色、弱アルカリ性では青色を示す性質があるため、画用紙は黄色く染まり、描いたものは青くなる。当日は児童３６名の参加があり、色の変化に歓声があがっていた

第２回（１１月２８日）では、塩化アンモニウムと水を入れた試験管を、塩化アンモニウムがすべて溶けるまで湯煎し、その後静かに冷やすと、試験管の中にできてくる結晶がまるで雪が降り積もるように見える実験を行った。低学年の教室では、湯煎にガスコンロを使用せずに大学から持ち込んだ恒温水槽（ウォーターバス）で実施したところ、この装置に興味を示す児童が多くいた。３５名参加。

第３回（１月３０日）では、「静電気のふしぎ」をテーマに、複数の実験を行った。なかでも乾いたタオルでこすった塩化ビニル管を蛇口から流れ出る水に近づける実験に、子どもたちが特に盛り上がっていた。３３名参加。

【令和５年度の活動予定】

今年度も年間３回の実施を予定している。

（文責：山森美穂）

Ⅱ－２．共生教育研究部門
Ⅱ－２－１.地域美術教育

共生教育部門地域美術では、今年度も地域の教育機関と連携することができました。連携では、子どもたちを中心とした数多くの参加者とともに地域美術活動をおこなうことができました。地域美術活動に参加される方々に安全な環境で楽しく充実した時間にするために工夫や協力してくれた多くの方々に心より感謝申し上げます。

「夏休みこども公開講座」では、木切れを使用した工作を行いました。この木切れは、大学での通常授業中の電動糸鋸盤を使う際に出た木切れです。そのような木切れは、公開講座などで使用することができるため廃棄せずに大切に保存してあります。木切れには、様々な大きさやかたち、質感があります。今回の「夏休みこども公開講座」では、木切れを教室の中央に山のように積みあげ木切れの山をつくりました。その中から子どもたちは、好きな木切れを探し出して組み合わせを考えて「自分の大切な宝物をつくろう」という内容としました。

木切れと木切れをつなぐ方法は幅25㎜の布製ガムテープを使用しました。布製ガムテープによる組み立ては、木工用ボンドなどに比べ、接着効率が良いことから使用しました。接着剤が乾くまで何もできないということが無く、張り合わせ後に直感的に制作を続けることができます。また、布製ガムテープの使い方を工夫すると立体的な貼り合わせもできることから使用しました。昨年度までの公開講座は、接着にホットメルト接着剤を使用していましたが火傷などをしてしまう参加者もいたため使用材料を改善しました。

参加した子どもたちの制作中の発言や振り返りの場面での発言では、「思ったものが作れてよかった」「大学のおねえさんやおにいさんが手伝ってくれて楽しかった」「もっとやりたかった」という子どもならではの表現で発言がありました。また参加してくれた大学生からは、「子どもの自由な発想に驚いた」「子どものころを思い出した」「将来教員になったらこういう機会を作って自分でもやってみたいと思った」「うまく指導できるか不安だったが活動が始まったら子どもたちと一緒に自然に関われた」など感想がありました。

これらの参加者の感想から、人と人、場と人の関わりによって人の気持ちが育つという大切な気づきを得られたことがわかります。参加した大学生は活動を支援する立場ですが、作業内容を経験したことが無くて自信が無いことでも、相手と同じ目線でともに考えることで交流の時間をつくりだせることを学べたのではないでしょうか。互いの思いを少しずつ理解し合うことは喜びであると思います。このように助け合いの大切さに気付く経験を得ること

ができる場が地域交流の最大の魅力であると考えています。その経験のできる一つの分野として地域美術分野があると思います。

美術分野の活動の特徴は、「かたちや色」を扱います。目で見て手で触って、感じたり考えたりしながら、目の前にあるモノを通して様々なことを思う活動です。

私たちは、日常生活の中で人と「話をしたり文字を書いたり」します。そのような表現は人にとって大切な力です。そしてまた同じように「かたちや色」も思いを深める大切な人間に備わる力なのです。

思いを大切に表現することの楽しさを味わう場面をつくっています。また、その活動にスタッフとして参加する都留文科大学の学生たちにとって地域の児童と関わることで見えてくる地域性や造形活動の子どもに与える効果を感じ考えてもらう場面となっています。更に、広い意味でも地域の教育機関との連携をとり、創造的活動のもつ学びの意味を確認する場面ともなっていると言えます。このような活動は今後もさらに続けていくべき活動であり、大学を中心としたさまざまな場所で専門性を活かした連携活動のさらなる展開が望まれていることを強く感じた年度となりました。

○宝保育所造形活動
　6月8日（水）「粘土やきもの体験」
　7月20日（水）「液体粘土―かお制作―」
　10月26日（水）「透明アクリルに絵を描く―」1月20日（金）「大きい紙で絵を描く」
○都留市夏休みこども公開講座
　7月30日（土）「木切れを使った工作」
　7月31日（日）「粘土を使ったやきもの製作」
○谷村第二小学校土曜体験学習の指導・活動運営
　10月29日（土）　「陶芸教室 マグカップ制作」
○ 都 留 文 科 大 学 付 属 小 学 校 陶 芸 教 室
　12月5日（月）「使って楽しいやきもの制作」

（文責：青木宏希）

Ⅱ－２－２．地域インクルーシブ教育

１．地域インクルーシブ教育分野の目的

地域インクルーシブ教育分野は、地域の特別なニーズのある人たち（およびご家族）への教育・心理的支援とインクルーシブな地域づくりを推進することを目的としている。

この分野の主要な活動は以下である。

① 特別なニーズのある人たちの週末の居場所づくりの活動“クロボ”
② 特別なニーズのある若者たちのキャリア形成支援の活動“キャリアデザインワーク”

２．活動の内容

① 特別なニーズのある人たちの週末の居場所づくりの活動“クロボ”

正式名称は、「クロスボーダー・プロジェクト」という活動である。「健常者と障害者の境界（ボーダー）を超える」という意味で名称を「クロスボーダー」とし、かつそのプロセスとして地域の方々と「コラボ（連携）」してやっていきたいという意味で通称を“クロボ”としている。

2022年度は、学期中、月1回土曜日に10：00～15：00で実施し、各回、小学生～社会人までで計30～40名程度（登録者としては、小学生10名、中学生4名、高校生11名、社会人15名）が参加してくれた。その他、午前中のホッケー活動のみ、社会福祉法人あすなろ会 みとおしの利用者さん数名がゲスト参加してくれた。

毎回、平均50名ほどの学生や市民がボランティアとして参加してくれた。学校教育学科「特別支援フィールドワークⅠA･ⅠB」「教育フィールド研究Ⅱ A･B･C･D」を受講する学生も、学生ボランティアとして参加した。

ここ数年の対応であるが、コロナ禍にあって、マスク着用や消毒の徹底、密回避などの感染対策の措置をとりながらも、年間6回の計画どおり、全ての回について実施することができた。

＜前期＞
５月21日（土）【午前】 ダンス、ホッケー
【午後】 アート
６月18日（土）【午前】 ダンス、ホッケー、パラスポーツ
【午後】 アート
７月30日（土）【午前】 ダンス、ホッケー、パラスポーツ
【午後】 音楽・てつがく
＜後期＞
10月15日（土）【午前】 ダンス、ホッケー
【午後】 音楽・てつがく
11月19日（土）【午前】 ダンス、ホッケー
【午後】 環境学習・てつがく
12月10日（土）【午前】 ダンス、ホッケー、パラスポーツ
【午後】 音楽、アート

クロボは、午前が全体活動、午後がグループ別活動としている。各回の活動の様子については、写真とともに、大学 HP と Twitter に掲載した。

②特別なニーズのある若者たちのキャリア形成支援の活動“キャリアデザインワーク”

□概要

本事業は 2015 年度からクロボのグループ活動の一つとして開催されてきた。2017 年度からは特別支援学校教職課程が開設されたことに伴い、当該課程のフィールド科目「特別支援フィールドワークⅡ」（集中講義）として位置付けられた。新型コロナ感染症への対応が求められる中、感染対策に留意しつつ、計画通り年間 6 回実施することができた。特別なニーズのある中高生や若者の将来イメージ形成に寄与する「思春期キャリア支援プログラム」として実施し、学生が当事者の将来展望の育成を目指すプログラムを企画運営するフィールド研究の場となっている。

□参加者

中高生・若者の当事者 13 名、大学生 17 名、保護者 12 名

□運営委員（地域の専門家）11 名

NPO 法人 おもちゃ図書館はばたき理事長、障がい者就業・生活支援センターありす就業支援ワーカー、フリースクールオンリーワン理事長、山梨県立ひばりが丘高等学校教諭、山梨県立やまびこ支援学校教諭、元大月市立小学校通級指導担当教諭、フリースクールにじラボ代表、県立高等支援学校桃花台学園教諭、保護者（放課後等デイサービス事業者、親の会「ぶどうの会」代表者）

□職場提供者

職場体験にご協力下さる事業所等は 10 カ所以上あるが、2022 年度は更に 4 カ所を新規開拓し、次の 6 カ所で体験させていただいた。コロナ禍においても暖かい理解のもとで貴重な体験ができたことを感謝している。

就労支援センターいちごいちえ様、ビッグボーイ田野倉店様、ダイハツ都留店様、ヤマト運輸山梨西桂センター様、長生保育園様、都留文科大学図書館様

□ワーク実施内容

目標　○自分はどんな大人になりたいか、仲間と一緒に考えてみよう。
　　○どんな仕事が向いているか、職場体験をしてみよう。
　　○将来の夢や希望をつかみ、今できることに取り組もう。

内容　(場所：3 号館)

No	日程等	内容
1	５月21日（土）13:00 ～ 15:00 保護者説明会 10:30 ～ 12:00	○みんなを知ろう (昨年度の振り返り / ドキドキ自己紹介 / 自己紹介すごろく)
2	６月18日（土）13:00 ～ 15:00	○ほっと。もっと。ぎゅっと。 (ＣＵＰＳ / 職業神経衰弱 /「あなたの仕事は何ですか？」)
3	７月30日（土）13:00 ～ 15:00 保護者の語り場① 10:30 ～ 12:00	○コンパス・オブ・ユア・ハート (自分史づくり / 交流・発表)
4	10月15日（土）13:00 ～ 15:00 保護者の語り場② 10:30 ～ 12:00	○私のやる気スイッチＯＮ！ (体験先を知ろう / 目標を決めよう / 社会人の参加者さんのお話を聞こう)
5	11月12日（土）10:00 ～ 15:00 A Whole New World	○職場体験 (いちごいちえ / ビッグボーイ / ダイハツ / ヤマト運輸 / 長生保育園 / 図書館)
6	11月13日（日）10:00 ～ 15:00 A Whole New World 保護者の語り場③ 10:30 ～ 12:00	○職場体験と今年度の振り返りをしよう！ (職場体験の振り返り / お礼状づくり / 今年度の振り返り / アルバムづくり / お疲れ様会)

□成果と課題

今年度、１７名の学生がこのワークに取り組んだ。参加者さんと初対面となった第１回ワークのときは、お互いに緊張したり戸惑ったりすることも当然あったが、回を重ねるごとに打ち解けあい、互いの気持ちが通じ合う場面も見られるようになった。少ない回数ながらも理解が深まりあったのは、学生たちが、毎回のワーク後に一人一人の参加者さんについて時間をかけて話し合い、内面理解に努めた営みがあればこそである。そうした話し合いを通して、改めて、参加者さんにとってのワークの意義を問い直し、新たな活動が生み出されてきた。また、今は大学生や社会人になっている参加者さんに対し、そのニーズに応じて午前中から参加してもらい、一緒に活動の準備をしたりフリートークやゲームなどで交流したりする時間をもつという新たな試みにも広がった。

学生たちの「参加者の思いを大事にしたいと願う姿勢」「ねらいを実現するための手立てを考える柔軟な発想」「知恵を出し合い協力を厭わないチームワーク」等、「見事！」と心から拍手を送りたい。

「保護者の語り場」では、互いの思いを聞き取りあい、支えあう保護者の方々の気持ちに触れさせていただいた。「前は泣いてばかりいた…」という語り場が、「今は笑顔で話せる場になっている」という言葉が印象的であった。もちろん、思い悩み涙することもあるだろう。しかし、「きっと大丈夫」と言ってくれる先輩ママの存在はとても大きな支えとなる。そして、その言葉は、不安や葛藤に心揺れながらも確かな成長の歩みを見せてくれているお子さんたちがいればこそであろう。「語り場」での時間と空間を共有させていただけたことは私にとっても貴重な財産である。

このワークを実りあるものにしようとご協力いただいている運営委員の皆さま方とつながれたことにも心から感謝している。ワークや語り場にもご参加くださり、貴重なご助言をいただくことができた。

前任の原まゆみ先生には、今年度「地域交流センター協力研究員」として、キャリアデザインワークを支えていただいた。新年度からは、運営委員及びスーパーバイザーとして引き続きご指導をいただけることは頼もしい限りである。

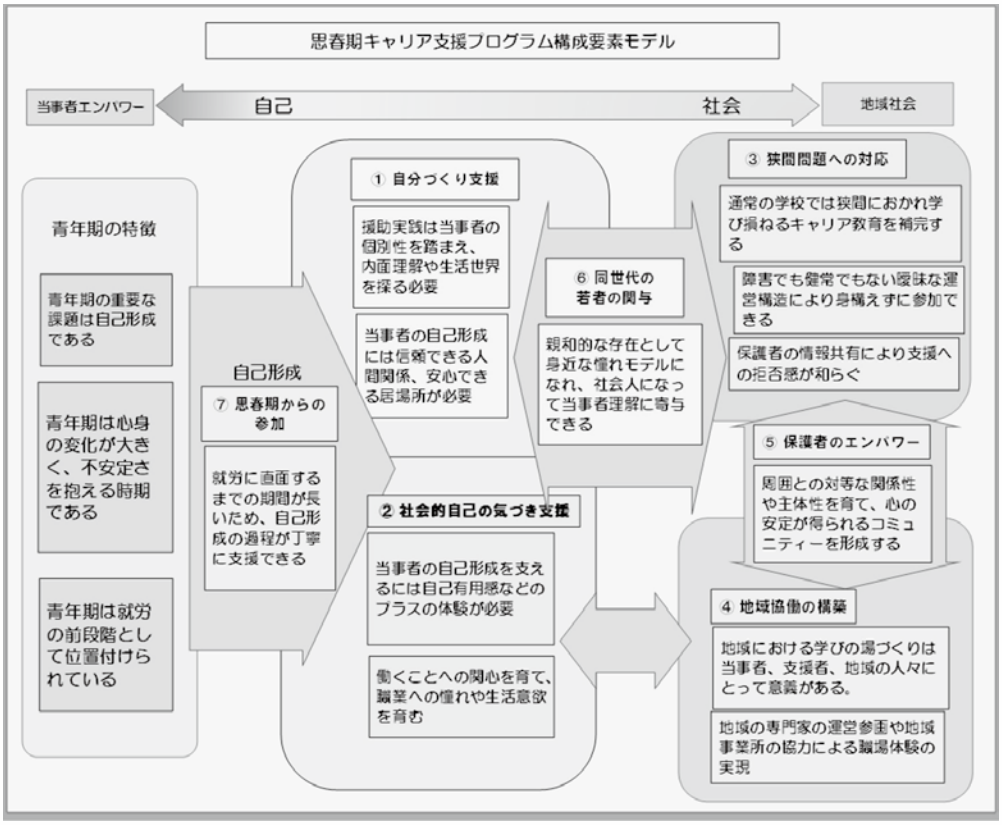
最後に、原まゆみ先生が研究され、まとめられた「思春期キャリア支援プログラム実践枠

組みのモデル図（以下、モデル図）」を紹介する。

この実践に必要な構成要素として、先行研究の検討から抽出された４点（①自分づくり支援、②社会的自己の気づき支援、③狭間問題への対応、④地域協働の構築）に加え、ワークから導き出された３点（⑤保護者のエンパワー、⑥同世代の若者の関与、⑦思春期からの参加）を加えた７点が明らかにされている。

このモデル図が、発達障害等のある若者の学校から社会への移行期支援の実践に活用され、様々な実施主体により多様な実践が展開され、その成果や課題が集積されることで本モデル図が更新されていくことや、学校から社会への移行期支援の意義と必要性が認識され、思春期キャリア支援プログラムの実践が広がることを強く願う。

思春期キャリア支援プログラム実践枠組みのモデル図



３． 2023 年度の活動の展望

2023 年度は、新型コロナウィルスが 2 類から 5 類に引き下げられることに伴って、コロナ禍に休止していたお弁当の買い物活動を再検討するなどの作業に取り組むことが考えられる。昼食持参の形が定着してきてもいるので、当の参加者や家庭の意見を踏まえながら、方向性を検討していきたい。

また、諸般の事情から、2022 年度をもって、NPO 法人「おもちゃ図書館はばたき」による参加者の送迎協力が終わりを迎えることになった。当団体には、参加者の送迎と付随して、新規参加者の紹介や出欠確認など、多面にわたって協力いただいてきた。心から感謝申し上げたい。

送迎協力の終了に伴って、残念ではあるが、これまではばたきの送迎を介して参加が可能であったメンバーの約半数が、クロボの活動から離れることになった。それにより、2023年度は参加者が大幅に減少する予定であるが、これを契機にして、地域のやまびこ支援学校やふじざくら支援学校等への広報・募集活動を充実させ、参加者の拡大に力を入れていきたい。

（文責：堤英俊、山本剛、佐藤比呂二）

Aimi.W

Ⅱ－２－３．社会教育

1. 社会教育分野について

共生教育研究部門の社会教育分野は、地域における多様なエージェントを巻き込みながら、それらがつくりだす共同学習の支援を旨とし、とりわけ、都留市内に新たな成人教育の場を創出し、そこに高等教育機関としての本学がもつ学問知をつなぎ合わせることを目的とする。

2. 2022 年度の活動：「つるぶん café」の開催

①活動の趣旨

「つるぶん café」は上記のことを目的として都留市内の喫茶店を会場とし、現代社会の問題や文学・芸術にまつわるさまざまなテーマを企画して地域住民、喫茶店オーナー・スタッフ、学生、講師が共に学び合う中からその後の関係につながるような場を提供する。

2019 年度に初回開催後、コロナ感染症拡大のため中止となっていたが、2021 年度はオンラインで実施した。2022 年度は、間隔を開けて座席を配置しアクリル板で仕切るなどの十分な感染防止対策を行なった上での 3 年ぶりの対面開催となった。

② 2022 年度「つるぶん café」の概要

日　　時：2022 年 11 月 19 日（土）14：30 ～ 16：00
テ ー マ：ポエトリー・ミーティング―中原中也の詩をよむ
講　　師：吉田恵理（本学国文学科・専任講師）
場　　所：バンカム２階
定　　員：14 名（学生補助 4 名を含む）
事前申込：必要
参 加 費：無料（飲み物一杯の注文を参加者にお願いする）

③参加者の声（アンケートから抜粋）

当日は補助の学生を除いて 10 名の参加があった。今回の企画は「ポエトリー・ミーティング」と題して、講師の解説を聴いた上でフリートークをしたり、詩の朗読や創作的なワークショップを行った。当日の感想は以下の通りである。

- 全くの初対面の人と中原中也、という一人の文学に対して語らう、というのは貴重で非常に楽しかったです。すごくいい時間を過ごさせていただきました。
- 地域交流と文学がつながるっておもしろい
- ただ詩について学ぶだけではなく、遊びを通してたくさんの詩に触れられるのがとてもよかった。思い出に残る体験だった。
- 詩を読む時の視点、言語化する参考になった。また詩に興味がある学生と会えた。
- 行を抜き出す催しがとても楽しかったです。人の趣味や解釈が垣間見えて、同じ詩人に対しての見え方の違いがとても面白く感じました。いつもの大学の講義とはまた少し違い、レクリエーションのような感じが新鮮でした。是非また開催して欲しいです。
- 好きなカフェで詩を読んだり先生のお話をお聞きしたり、自分で詩を作ったりできて本当に楽しかったです。雰囲気がとても楽しくて優しくて良かったです。リフレッシュできました。

3. 2022 年度の総括と 2023 年度に向けて

3 年ぶりの対面開催となった 2022 年度は、「つるぶん café」の趣旨を再確認することとなった。市内の喫茶店を借りて教室とは違うリラックスした空間をつくること、声を張らず静かに詩をよむ声が届くような近い距離、それほど多くない人数のささやかな集いであること、市民講座のような企画と異なり、講師が一方的に学問知を押しつけるのではない双方向的なやり取りや遊びがあること。こうした趣旨に沿う形で、今後はより多くの地域住民の参加を促すため、年に複数回の実施を検討し、広報の仕方を見直す必要がある。

（文責：吉田恵理）

Ⅱ－３．まちづくり研究部門

まちづくり研究部門の目的

まちづくり研究部門では、持続可能なまちづくりを学生とともにデザインし、地域住民や自治体、地元企業等と連携しながら実践活動に移し、実社会での学びの機会を創出することを目的としている。学生自らが地域社会の課題を捉え、その解決策を考え実践活動につなげ、これからのまちや地域社会のあり方を考察する機会を創出するとともに、地域に対する関心を高めることを目的とする。2022 年度は、「富士急行線谷村町駅舎を拠点にした地域連携のまちづくり」及び「沿線自治体活性化を目指した体験型観光ツアーの実践」の 2 プロジェクトを実施した。

１　富士急行線谷村町駅舎を拠点にした地域連携のまちづくり

目的

本プロジェクトは、谷村町駅舎を拠点に地域と大学生との交流・学び・まちづくりの拠点を創出し、中心市街地の賑わいづくりに寄与するとともに、地方鉄道を持続可能なものとして市民が支えるしくみづくりを試みることを目的とする。

事業名称・事業主体

全体事業名

産官学民連携による「谷村町駅舎を活用した地域づくりプロジェクト」

事業主体（下記５者による協働連携）：

・早馬町自治会
・富士急行株式会社
・都留文科大学教養学部地域社会学科鈴木健大オープンゼミ
・都留市
・生涯活躍のまち・つる推進協会

実施方法

地域社会学科鈴木健大担当による、全学部全学科の学生を対象にした、オープンゼミとして実施

実施内容

谷村町駅における放課後の子どもたちの居場所づくり「ぷらっとはうす」を実施した。2021 年度は新型コロナウイルス感染症の流行で、年間でわずか 9 回しか実施できなかった。2022 年度も新型コロナウイルス感染症流行の波が第 6 波(2022.1.1 ～ 6.25)、第 7 波(2022.6.26 ～ 10.11)、第 8 波（2022.10.12 ～ 2023.2.28）と続き、到来するごとにその規模が拡大した。しかしながら、保健センターの指導を受け、感染予防対策を講じて、2022 年度は広報を積極的に行わず、限定した大学生の人数と固定した参加者で小規模で定期的に開催することができた。そのほか、8 月には 2 日間宿題教室を、9 月には「文化祭」と題して「ふるさと会館」で子どもたち向けのイベントを開催することができた。

実施内容：（1）「ぷらっとはうす」（於：富士急行線谷村町駅）
5/18（水）～3/22（水）、毎週水曜日 15：30 － 17：00、計 28 回
宿題の手伝い、ゲーム等（参加人数は概ね毎回 4,5 人程度）
（2）「宿題やっつけ隊」（於：富士急行線谷村町駅）
8/9（火）10（水）、10：00 － 12：00、計 2 回
（3）「ぷち文化祭」（於：都留市ふるさと会館第 1・2 研修室）
9/25（日）、14：00 － 16：00
もぐらたたき、宝探し、チャレンジ・ボウリング、占いの館、射撃
そのほか：6/4（土）5（日）羽野幸氏主催 田植え体験参加（大学生のみ）
10/1（土）2（日）羽野幸氏主催 稲刈り体験参加（大学生のみ）

一年間を振り返って

2020 年から始まった新型コロナウイルス感染症の流行は 3 年目になったが、参加人数、実施内容、規模を限定し、感染症対策を行い、この 3 年間で初めて定期的に開催することができた。そのため、子どもたちも定期的に通うことができ、小規模ではあったが、通っている子どもたち以外も対象にした「ぷち文化祭」と題したイベントも実施することができた。

しかしながら、制約を受けながらでの開催はマンネリにならざるを得ない側面があり、イベントを実施することもはばかれることから、参加学生にとってモチベーションの向上につながりにくく、やめていく学生も多く生じることにもなった。

2022 年度末で「ぷらっとはうす」を開始してから 4 年 3 ヶ月になるが、この間のほとんどが新型コロナウイルスの流行期間と重なってしまった。大学生にとっては駅舎での活動だけがこのプロジェクトの活動であることのように誤解が生じており、感染希望の縮小が報道されていることから、次年度からは大学生たちの活発な議論と創意工夫を盛り込んだ活動を少しでも増やしていきたい。

参加学生　計 35 名

地域社会学科 22 名、英文学科 5 名、国文学科 1 名、比較文化学科 3 名、
国際教育学科 2 名、学校教育学科 2 名

「ぷらっとはうす」の様子（2022 年 11 月）

「ぷち文化祭」の様子（2022 年 9 月）

２　富士急行線沿線の活性化を目指した体験型観光ツアーの実践

目的

本プロジェクトは、富士急行株式会社及び都留市と連携し、本学と教育・研究活動を継続的・発展的に行い、富士急行線沿線市民とも連携をはかりながら、富士東部地域全体の発展に寄与することを目的とする。

地方において公共交通インフラの維持・確保は、大きな課題の一つである。沿線人口が減少し、特にコロナの影響でインバウンド観光客は蒸発してしまった状況が続く。地元の鉄道に関心や親しみを持ち、新たな価値を付加して、今後の地方鉄道のあり方を考察する。

なお、本プロジェクトは、本学･富士急行株式会社･都留市とで 2022 年 5 月に締結した「持続可能な地域づくりの推進に関する連携協定」に基づくものである。

実施方法

地域社会学科鈴木健大ゼミ生及び「ぷらっとはうす」有志学生を対象にした、セミオープンゼミとして実施

実施内容

2020・2021 年度にかけては第 1 弾として、都留アルプスを「観光資源」と見立て、都留市で人口減少が大きい女性をターゲットに、登山入門をテーマに YouTuber「やまくっく・やぎちゃん」を迎え「山ガールデビューツアー」を実施した。

2022 年度は、2 本の観光ツアーを企画・造成した。一つ目は、昨年度に引き続き、域外の女性を主なターゲットに交流人口を創出することを目指した「山ガール」ツアー第 2 弾である。二つ目は、本学学生を主なターゲットに、都留市の魅力を発見してもらうための「マイクロツーリズム」である。「マイクロツーリズム」とは、自宅から 1 ～ 2 時間程度の移動圏内の「地元」で、地域の魅力の再発見と地域経済への貢献を念頭に置いた旅行形態とされ、新型コロナウイルスの感染拡大をきっかけに広まった。

前期は、観光及び地方鉄道に関する基礎学習を実施したのち、地域分析やマーケティング学習等を行い、富士急行（株）及び都留市に企画案のプレゼンテーションを行った。夏季休暇中に企画案の見直し及び準備を行い、後期に富士急トラベル（株）を通じて販売した。

後期は、企画した観光ツアーを学生の運営により実施し、12 日に富士急行職員、都留市職員、本学職員とともに「研究報告及び企画提案会」を実施した。

（1）観光ゼミ（定例）の実施

定例ゼミ：4/11（月）～ 12/6（月）、毎週月曜日 18：10 － 21：00、計 25 回

実施内容：富士急行（株）及び都留市講義、統計や輪読による観光に関する基礎学習、ニューツーリズム事例調査、マーケティング基礎学習、トレンド調査、地域分析、企画立案、企画プレゼンテーション、三者による振り返り会（12/12）

（2）観光ツアー企画・準備

ツアー企画案立案、富士急行（株）との調整及びプレゼンテーション、関係者及び関係機関との調整・打ち合わせ、ポスターやパンフレット制作、運営準備、必要備品等購入、当日の運営、アンケート結果まとめ等

（2）フィールドワーク

九鬼山登山、実踏調査（ルート、店舗等）

（4）観光ツアーの造成・運営

①「山ガール」ツアー

ツアータイトル：「あつまれ山ガール！！ YouTuber やまくっく・やぎちゃんと行く！　九鬼山で「都留」を味わう「山ごはん」ツアー」

実　施　日：2022 年 11 月 6 日（日）

募 集 人 数：30 名（最少催行人数 25 名）　※最少催行人数に至らず、未催行

ツアー代金：8,700 円

ツアー行程：

8:35　富士急行線禾生駅集合

8:45　はじめの会、やぎちゃんの講義、山ごはん（サンドイッチ）づくり、山おやつ配布（於：禾生地域コミュニティセンター）

10:45　九鬼山登山

15:35　休憩、秋のリースづくり、帰りの会（於：道の駅つる）

17:00　おわりの会、アンケート調査、解散

②「マイクロツーリズム」

ツアータイトル：「乗って！作って！見て！食べて！都留のおいしいを巡る旅　～ご縁が繋げた人と食～」

実　施　日：2022 年 11 月 6 日（日）

募 集 人 数：24 名（最少催行人数 18 名）　※参加人数 24 名

ツアー代金：1,980 円

ツアー行程：

8:50　都留文科大学 5 号館集合

8:50　はじめの会、都留市の DDGs 企業紹介ビデオ（学生制作）

9:15　移動

9:40　富士急行（株）による事業紹介（於：都留市駅）

10:25　「まーさんちの庭」によるトゥルシーハーブソルト作り（於：cafe 織水）

11:40　移動

12:50　「FU・RE・RU」弁当の昼食（於：都留文科大学）、「生産者の声」ビデオ紹介（学生制作）

13:40　移動

14:50　「戸塚醸造店」見学、「One Note Coffee Roaster」喫茶

16:10　おわりの会、アンケート調査、解散

2022 年度を振り返って

「山ガール」ツアー第 2 弾は、応募者数が最少催行人数に至らず、実施できなかった。理由としては、販売価格が 8,700 円と第 1 弾と比較し高額に設定したこと 、「やぎちゃん」がツアー価格より低額で参加者との交流会を開始したこと、売り出しがツアー当日の 2 週間前と遅れたこと、販売開始時期が「GO TO トラベル」事業開始時期に重なってしまったこと等によるものと分析している。前期末のプレゼンテーションにおいて企画が十分に通らず、夏季休暇の多くを企画の見直しに費やすこととなってしまった。

「マイクロツーリズム」は、学生たちの献身的な広報活動もあり、定員枠上限の参加者があっ

た。参加者のうち 80％が学生であり、多摩美術大学が 5.3％、東京電機大学が 5.3％、都留文科大学が 89.5％であった。アンケート調査からは、「自分一人ではできない体験ができた。行かない場所、関われない人と関わりが持てた」「都留に魅了された人と都留を知らない人を繋げる良いツアーだった」等肯定的な感想がほとんどを占め、満足度の高い評価となった。しかしながら、ツアー代金を 1,980 円と破格の設定にしたことから、ビジネス面では成立しなかった。

観光名所や景勝地がない地域において新しい観光を創出する、といった目的に照らすと、2 本の企画のうち 1 本しか実現することができなかった。昨年度同様、実施したツアーの参加者からは高い評価を得たが、利益を生むことができず、民間企業との連携について難しさを痛感した。しかしながら、空き時間や夜間、土日、夏季休暇と、社会に新しい価値を生むことに精進した学生たちの努力には最高の賛辞を送りたい。

参加学生　計 32 名

地域社会学科 4 年 10 名、3 年 10 名、2 年 10 名

英文学科 4 年 1 名、比較文化学科 4 年 1 名

観光ゼミの様子（2022 年 7 月）

九鬼山フィールドワーク（2022 年 9 月）

「マイクロツーリズム」「cafe 織水」でのワークショップ（左）と
「戸塚醸造店」見学の様子（右）（2022 年 11 月）

「山ガールツアー」ポスター

「マイクロツーリズム」ポスター

（文責：鈴木健大）

Ⅱ―４．グローカル交流研究部門

グローカル交流研究部門の目的

地域の自然と文化の魅力を学び、また本学の留学生や多様な人びととの交流から地球規模の視野を育み、持続可能な社会のあり方をともに考えることをテーマとしている。2022 年度は初めての試みとなり、留学生の参加のもと都留市鹿留にある今宮神社においてムササビ観察会を開催した。

１. ムササビ観察会

目的

ムササビは日没後 30 分ほどで活動を開始するため、生息場所を確認してさえおけばほぼ確実に出会うことができる野生動物である。このムササビの生活を脅かさないよう少人数で観察するなどの工夫は、今泉吉晴氏（本学名誉教授）により都留市で編み出されたもので、地域交流研究センターでこの観察会を受け継いできた。本学の学生が主体的に観察会を運営し、留学生とムササビをじかに観察することでムササビの生態とともに地域の自然、世界の自然の現状についてともに考えることを目的とする。

プログラムの名称

ムササビ観察バスツアー

実施方法

地域交流研究センターの自然共生研究部門で開催してきたムササビ観察バスツアーと同様の方法で開催した。本学の環境 ESD プログラムを履修する学生が主体となり留学生を対象としたムササビ観察バスツアーを企画･運営し、国際教育学科の学生が通訳として参加した。なお、コロナ禍での実施ということもあり、あらかじめ活動計画書を提出したうえで、観察会全体の人数を 15 人以下に限定して開催した。

実施内容

まず、本学の環境 ESD プログラム履修生のうち地域交流研究センター主催のムササビ観察会を実習先として選択した学生が、この観察会の企画と運営を担当した。事前の観察と打ち合わせ、リハーサルをするなど１ヶ月ほど準備をした。また国際教育学科の３名の学生がアシスタント及び通訳として参加したこともあり、企画・運営の学生と留学生との意見交換も実現できた。ムササビが生息している都留市鹿留にある今宮神社へは安全面を考慮してバスで移動した。神社ではムササビが生息する自然環境について説明をした後、観察を行ったが、幸いムササビが滑空する姿を確認することもできた。また、ムササビの生息を確認できる糞などを境内で探す活動も行った。神社での観察終了後、地域交流研究センターに戻り、学生による解説と振り返りの講座を開催した。

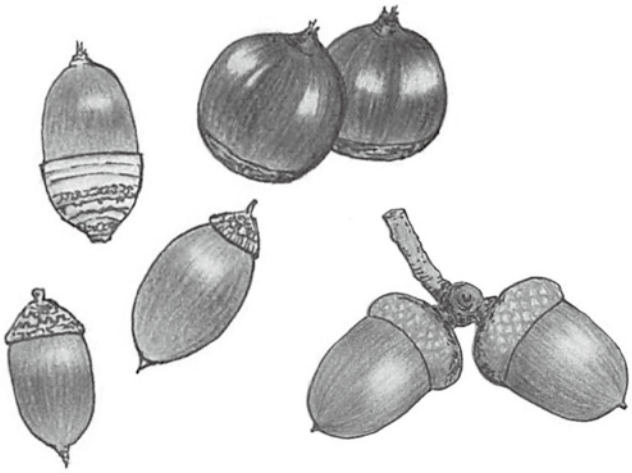
実施日時：2022 年 11 月 12 日（土)、16 時 30 分～ 18 時 30 分
開催場所：地域交流研究センター
観察場所：都留市鹿留今宮神社
参 加 者：学生スタッフ 4 名、留学生 7 名、国際教育学科学生 3 名、教員 3 名、事務局 1 名

一年間を振り返って

国際教育学科と連携のもと、グローカル交流研究部門としては初めての試みとなる自然観察会を無事に終えることができた。参加した留学生からは、「これまでムササビを見たことがなかったので面白かった」、「ムササビを見て、自然との強いつながりを感じた」、「想像していたよりも大きかった」、「ほかのリスの仲間と比べて大きく感じた」、「こうした地域の動物相がとても面白い」、「将来、生物の先生になる勉強をしているので、こうした動物について知れるとてもよい機会となった」などの感想が寄せられた。また通訳をしてくれた学生からは、「飛び立つところを実際に見られて感動した」、「ムササビを見たことがないので貴重な機会だと思いました」、「通訳としても参加者としても良い経験となりました。この経験を今後の勉強の参考にさせていただきます」、などの感想があった。

2時間という短い時間ではあるが、参加者が野生動物を観察する経験を共有し交流することで地域の自然、世界の自然について考える契機ともなる。今後は、地域交流研究センターで蓄積してきた観察会の手法を活かして、留学生と学生だけでなく、市民を交えた自然観察会も計画していきたい。

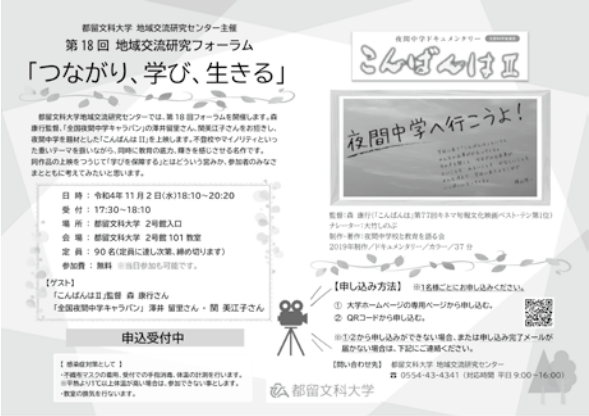
（文責：原和久・北垣憲仁）



Aimi . W

Ⅲ．インターフェイスとメディアの活動

Ⅲ－１．第 18 回地域交流研究フォーラムの開催



第 18 回地域交流研究フォーラムの開催

「こんばんはⅡ」「つながり、まなび、生きる」

開催日時：2022 年 11 月 2 日 (水)　18 時 10 分～ 20 時 20 分

開催内容：38 分間の映画上映（「こんばんはⅡ」）のあとゲストともにクロストークを行う

事務局

これより第 18 回地域交流研究フォーラムを開催したいと思います。まず最初に開会のあいさつを当センターのセンター長である北垣憲仁先生よりご挨拶をいただきたいと思います、よろしくお願いします。

北垣

皆さんこんばんは。地域交流研究センターの北垣と申します。今日は平日しかも夜間にもかかわらずたくさんの人にご出席いただきまして本当にありがとうございます。地域交流研究センターは名前の通り、地域の方々の支えのもと様々な事業と研究活動をこれまで蓄積してまいりました。こうした大学らしい取り組みをこれからも受け継ぎ、発展させていこうという目的でセンターが発足いたしました。

皆様のお手元にこのような雑誌がありますでしょうか。この冊子の中に取り組みや理念などが簡単に掲載されておりますので、お時間があるときにぜひご覧ください。地域交流研究フォーラムは、地域の自然、それから教育、暮らしや仕事といった、大切な地域の課題といったものを皆様と意見交換をしながら一緒に考えていく機会を作りましょうという目的で開催するものです。センターとしてもこの事業を本当に大切にしていきたいと思っております。

１８回目となる今回は「つながり、まなび、生きる」と題しまして、森康行監督、全国夜間中学キャラバンの澤井留理さん、関美江子さんをお招きして夜間中学校を題材とした「こんばんはⅡ」を第１部で上映したいと思っています。同作品の上映を通して学びの保証といったものはどういったことなのかということを皆さんと一緒に考えていきたいと思っております。

後でご紹介いたしますが、森監督は本学でも非常に馴染みの深い方で、このセンターでも

これまで何度も上映してきましたが、太田元学長のドキュメンタリー映画「かすかな光へ」といった映画、これを監督された方でもあります。それから澤井留理さん、関美江子さんには遠方にもかかわらず本日このように参加していただいたことをありがたく思っております。心よりお礼申し上げます。皆様との意見交換によって充実したひと時にしていただけたらと思っております。

地域交流研究センターは発足から２０周年を迎えることとなりました。今年来年とさらに皆さんと交流の輪をさらに広げ深めながらよりよい活動をしていきたいと思っております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

事務局

本日フォーラムの様子を事務局で写真を撮らせていただきます。なるべく皆様の顔が映らないように撮影させていただきますが、もし何か問題がございましたら、事務局までお申し付けください。それでは第１部のほうに入らせていただきますが、その前に開催の趣旨などの説明を本学の学校教育学科邊見信より説明させていただきます。よろしくお願いいたします。

邊見

こんにちは、学校教育学科講師の邊見です。今回はフォーラムにご参加くださいまして誠にありがとうございます。関さん、澤井さん、森監督、また、皆さんと映画を上映した後に語り合う時間をとれますこと非常にうれしくい思います。ここでは簡単に開催の趣旨を説明させていただきます。

今回上映する「こんばんはⅡ」の題材となった夜間中学は 2022 年 10 月現在、全国に 15 都道府県 40 校あります。始まりは戦後直後に成立しています。戦前は小学校卒業がそれほど珍しい時代ではありませんでした。いきなり中学校が義務教育といわれても、なぜ通わさなければいけないのか、むしろ働いて家にお金を入れなければならず、昼間に学校にいる暇はない。そういう子どもに教師たちが出会って、昼間は行けないけれど夜なら行けるという声をもとにスタートしたのが夜間中学です。それが 1970 年ごろに学齢に入っている子どもだけではなく、学齢の時に学びを奪われた人々に対し学びを保障する場になっていく。この時は実際に学校に通っていないが中学校の卒業証書を貰ってしまった人は夜間中学の対象から漏れてしまっていました。

1990 年代ごろに入ると入管法の改正により外国人労働者が増えてきたことで、夜間中学に外国に籍を持つ人たちが多く入っていくようになります。

教育に恵まれない人々の願いにこたえる場として発展してきた夜間中学ですが、戦後からここまで法的根拠が曖昧で、時代ごとに必要な人は必ずいるのに、法的に認められなかったり、廃止や縮小の対象となってきたりした存在です。その大きな潮目が変わったのが、2016 年の教育機会確保法の成立です。これを境にして政府や文科省も夜間中学を拡充したり支援したりするという方向になっていきます。そしてすべての都道府県に最低でも 1 校の夜間中学を設置するのが現在のスローガンとなっています。

夜間中学は東京都だけでも 8 校あるのですが、その中の 1 校がある区で私は生まれ育ったこともあり、その区の夜間中学に何回か伺わせていただいております。私は、映画やラジオなどメディアによる学びの保障が研究のテーマです。今だとネットで学び直そうとすればいくらでも学び直せたり、本屋さんに行けば英語とか資格等の本や高校の時の教科書等が売っていたりするので、学び直そうと思えばいつでもできるというような気持ちでした。だから

なぜ夜間中学に行くのか疑問がありました。

集団で学ぶことに意味を見出しているのかなと考えていたりしましたが、実際に夜間中学に行っている人たちの夜間中学に来るまでの経緯を聞いたら、いろいろな選択肢の中から夜間中学を選んだというのではなく、小学校からずっと引きこもりだったが親が高齢になって引きこもることができなくなり、家庭にソーシャルワーカーが入ってそこでようやく夜間中学に繋がったという話をうかがいました。そこで初めて夜間中学におけるひりひりとした学びの保障というものを体感したことが、今回「こんばんはⅡ」を上映しようと考えたきっかけです。

現在、日本の未就学者は全国に 94,455 人いることが分かっています。さらに、小学校は卒業したが、中学校に通えなかった人は 804,293 人いることが分かっています。この数字のほとんどが高齢者や海外から来られた方なのではと思われるかもしれませんが、実は日本全国の 15 歳から 50 代の方でも 3 万人を超える未就学者がいることが国勢調査で分かっています。調査によって分かったこのような方々の存在が先ほどの全国の都道府県に少なくとも 1 校をという政府の方針に繋がっていきます。

コロナウィルスが流行し学校が休業してしまったとき、子どもの学びを保障するというのは、オンライン環境を整備して子どもが家庭学習をできるようにするということと意味のうえで大きく重なっていた気がします。ここには、夜間中学の苦闘の歴史がまさに体現してきたような、生徒たちにとって今日のこの学びがどのような意味を持つのか、生活の中で彼らがなぜ学びに向かえるのか、その子が今学びに向かえないのはなぜなのかとか、その子の生活の中で学びをとても尊いものとして受け止めるといった意識や問いが抜け落ちていたような気がします。

今日は、第 1 部の「こんばんはⅡ」の上映と第 2 部のクロストークを通して、ここに集まってくださった皆様と学びを保障するということの根源的な問いを一緒に考えていきたいと思います。ぜひどうぞ最後までよろしくお願いいたします。

【こんばんはⅡ】上映開始
【こんばんはⅡ】上映終了

日向

この後、第 2 部でクロストークを行います。舞台を整えますので少々お待ちください。

邊見

改めまして本日お越しいただきました、森康行監督、澤井留理さん、関美江子さんのご紹介をここでさせていただきたいと思います。

森康行監督は数多くのドキュメンタリー映画を監督されてこられました。映画賞受賞も多数ございます。今回の「こんばんはⅡ」の前には「こんばんは」の作品を監督されており、夜間中学の周知のため全国各地を周っておられます。本学にもかかわりの深いところとしては当時 93 歳の大田堯先生（編集部註：本学元学長）をメインとして取り扱った「かすかな光へ」で知られております。

澤井留理さんからは素敵なお写真を事前にいただきました。澤井留理さんは東京都の小学校で音楽の先生を 12 年間お勤めになられた後、中学校に移動されました。40 代で荒川都立第九中学校の夜間学級に移られ、それ以降長く墨田区立の学校も併せて 21 年間に渡って夜

間中学に勤めてこられました。

関美江子さんからも事前に素敵なお写真をいただきました。ありがとうございます。関美江子さんは日本語教師として1980年代から企業・大使館で日本語研修を行ってこられました。また2011年からは神奈川県の公立高校で外国につながりを持つ子どもたち向けの日本語クラスを担当されております。映画の中でも登場した自主夜間「えんぴつの会」のスタッフとして2015年より務められ、2021年からは鎌倉に「えんぴつの会」を設立されました。

今回はこのお三方にお越しいただけましたので、クロストークのテーマを一応「これまでの印象的な出会い、学びを支えるためにつながり続けることの難しさ」としたのですが、事前の打ち合わせでお三方ともぜひ皆さんに伝えたいということをご用意いただいたということですので、それを中心にこのクロストークを進めさせていただければと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。ではまず、関さんからよろしくお願いいたします。

関

関美江子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。今日は都留文科大学にお呼びいただいてほんとにうれしく思います。「こんばんはⅡ」を今皆様と一緒に拝見したのですが、ほんとに感動しますね。胸がいっぱいでここにきて皆さんと一緒に見ることができてよかったなと思います。今日は私が日頃スタッフとしてかかわっている２つの自主夜間中学校で出会った学習者たちの学びのすがたをご紹介しながら、今回のフォーラムのテーマである「つながり・学び・生きる」ということについて考えてみたいと思います。

２つの自主夜間中学とは、東京の墨田区にある「えんぴつの会」と神奈川県の鎌倉市にある「えんぴつの会」です。墨田区のほうは長く運営しており10何年ほど続いております。鎌倉のほうは去年の４月に立ち上げたばかりです。学習者さんたちはどういう経緯や背景から自主夜間中学にいらしたかどんな風に学んでおられるか。そしてその人の中にどんな変化が起きているのか。また私自身も「えんぴつの会」の人たちと接するうちどんなことが変わったのか。それこそ大田堯先生の「ちがう・かかわる・かわる」という言葉を念頭に置きながら、お話をできたらと思います。

初めに20代の男性、ここではＡさんと言わせていただきます。Ａさんは小学校３年生の時から学校に行けなくなり、中学校ではほとんど登校しないで形式卒業となりました。通信制高校に入ったもののほとんど学習はできなかったのです。その後、家に引きこもってしまいました。２年前から週に５日作業所に通うようになりました。家族とは少し会話もできますが、外に出ると誰とも会話をしないという状態でした。今年の１月、読み書きを練習したいということで、その方がいらっしゃいました。小学校５年生程度の本を読んだり、漢字の勉強や音読をしたり、言葉の意味や表現について丁寧に１つ１つ国語辞書を使って考えていくような言葉の中に入っていこうとする学びを続けたのですが、なんと驚いたことにどんどんやる気が出てきて、階段を２段飛ばしで行くような勢いで勉強し始めました。それで先週のことですが、ふりがなのない普通の新聞記事を読めるようになったんです。とても驚きました。

先日お父さんがこんなことをおっしゃいました。「息子は、〈えんぴつの会〉で勉強の仕方を教えてもらったので家でも国語辞書を引いたりして勉強をするようになりました。毎日１時間ほど勉強をしております。２年前までの生活がうそのようです」と。鎌倉の「えんぴつの会」は週に１回２時間です。大したことはできません。けれども家で勉強するということはできるようになったのです。これはとっても大きな意味があると思います。

会話もできるようになりました。以前は床に落ちた消しゴムを私が拾ってあげると「ありがとう」って言えなかったんです。そばにいるとありがとうという気持ちでいることは分かるのですが、言葉が出なかったのです。それがこの頃は出るようになりました。自主夜間中学校がいいなと思うところは、いろんな人がいることです。大人の外国人の人とか中学生の不登校の子とか、少ないけどそういう人たちがいるわけなんです。そうするとみんなが休憩の時間とかに「だれだれ君どう？なにしてるの？どんな勉強してるの？」と話しかけてきます。みんなはAさんが話したくない人っていうのは知っているけど話しかけてくるんですよね。そうするとだんだんと何かが変わってきて、この頃は少し会話というやり取りができるようになってきました。

そうすると家でも前よりも会話が増えたということです。週に１度の参加で以外にも生活は大きく変わります。「えんぴつの会」それ自体が小さな社会であり、またその先の社会につながる窓であるともいえると思います。昨年４月相模原市に神奈川県に３つ目の公立夜間中学校ができましたが、Aさんも来年度の入学を希望しています。今度は「えんぴつの会」から夜間中学校につながりそうです。

次に「えんぴつの会」の西村直美さんのことをお話ししたいと思います。西村さんご本人が匿名ではなく実名で話をしてほしいとおっしゃっておられたので実名でお話を進めます。西村さんは現在８４歳で、お１人でお住まいです。西村さんは中国残留孤児１世ということです。西村さんも子どものころに、一家は富山県から満蒙開拓団として中国東北部に入植しました。終戦間近に壮絶な逃避行でお母さんと弟と生き別れて孤児になってしまいました。お父さんは富山県から一緒に行ったのですが、あちらに着いたらすぐに徴集されてお家にはずっといなかったとのことです。お父さんはどこで亡くなったか分からないけど遺骨も戻ってきてはいません。孤児になったとき西村さんは８歳でした。中国人の家族に引き取られましたが、学校には行けませんでした。日本語は忘れていきました。約50年暮らした中国から家族を伴って今から30年前に永住帰国されました。それからも様々な苦労が押し寄せて日本語を勉強する余裕は全くありませんでした。

80歳を目前のある日に元在留孤児の集まりのある場で「えんぴつの会」のことを聞きます。そこは西村さんの住む団地から歩いて５、６分の所でした。平仮名やカタカナ、生活のための言葉などを、行きつ戻りつしながらも学んでいきました。鉛筆を握って勉強に取り組み西村さんは、小さな体で胸まである深い雪をかき分けてえっさえっさと進む人の姿に私は見えました。そのうち私たちスタッフは、西村さんに絵日記を書くことを進めました。簡単なことでも表現するということに取り組んでみてはと思ったからです。西村さんは嬉々として取り組みました。「えんぴつの会」がない日も家で毎日、絵日記を書くようになりました。

初めのころは語彙も少ないため話題は身のまわり半径５メートルの出来事ばかりでした。何時に起きて何を食べて何時に寝たかが延々と毎日続きました。ところがそのうち変化が現れました。筆圧が強くなり、薄かった文字が濃くはっきりとしてきました。次に話題が半径５メートエルを超えてきました。散歩の途中で見た街の風景、病院の待合室で待つあいだ、貼ってあったポスターを片っ端からノートに書きます。バスを待つ間にバス停の文字を写します。物語を丸ごと一冊書き写します。挿絵も書きます。

学びは学びを生むのですね。探求する心が動き出すのです。映画の中でフィリピンの戎香里菜さんが、「小さいころ学校に行かなくなったら私の中で何かが止まった。でも夜間中学校で学ぶようになったら何かが動き出した」と語っていることはこういうことではないかなと思います。学ぶと未来が見えるという、カンボジア難民の伊藤さんのお言葉を思い出します。

西村さんの絵日記は、「えんぴつの会」でも評判になって時々みんなで読ませてもらいました。西村さんはおとなしい方ですがそんなときは得意そうに見えました。読み手の存在があるということは大きいことですね。学びを受け止めてくれる人そういう人が必要なんです。こうしたことができるのも自主夜間中学の機能なのではないかと思います。西村さんは膝が悪くなり最近は「えんぴつの会」にいらっしゃいませんが、いまだに日記を続けておられて、２、3 冊たまると私の所へ郵便で送ってくださいます。「もう絵日記はやめられない、絵日記があるから大丈夫です」と。それがこちらのつい最近送ってもらった日記です。

（日記の提示）戦争のために母語を奪われて、ようやく母語の国に戻っても、失われた母語はよみがえることはありませんでした。周りの人が話す言葉がわからないということは、どんな気持ちでしょうね。トンネルがずっと続いているような感じかな。今、西村さんは拙い日本語でも毎日、毎日、日記を書いています。文字を身に付けて書くということに意味があって、人間としての尊厳を取り戻しておられるのではないかなというふうに思います。

今度は私自身のことですが、私自身も変わりました。去年 4 月に鎌倉「えんぴつの会」を立ち上げてから、周りのたくさんの人たちに支えられています。交通費も出ないのに駆けつけてくれるスタッフもいます。お金はいらないからここを使ってねと場所を提供してくれる人がいます。親切な人が世の中にこんなにいるのかとほんとに驚きました。人を信じてもいいのだ。信じていこう。私は心からそう思えるようになりました。人を信じるというのは言い換えれば自分のことを忘れるということかもしれないと思ったりもします。自意識の強い人間でしたが、自分のことをあまり考えなくなって楽になりました。

「えんぴつの会」を作られた見城慶和先生と見城先生の師である（故）塚原雄太先生は、「人に迷惑をかけて生きろ」と夜間中学の生徒たちに語られました。言い換えれば、助け合って生きていこうね、そういう社会を作ろうねということだと私は理解しております。夜間中学の精神はそこだと思います。その精神を昼間の学校や社会のほうにつなげていきたいともいます。これからこの後皆さんと一緒にお話しする時間があるようですが、どうしたらそんなことができるのか、映画の中で１週間学校を休んだらそのあと学校に行けなくなった方がいましたが、学校に行ける学校を作るにはどうしたらよいか一緒に考えていけたらなと思います。どうもありがとうございました。

澤井

皆さんこんばんは。澤井留理と申します。まず私は都留文科大学の地域交流研究センターにお呼びいただいて感動しています。『フィールド・ノート』は毎回読んでいるわけではありません。大田堯先生の家で大田サークルというものをやっておりまして、そこで先生がお読みになった後のもので自由に持って行っていいよというものがあり、『フィールド・ノート』を見つけて非常に喜んで持って帰って大事に読んでおりました。

その中に非常に素晴らしい詩があったんですね。「起き上がる朝」遠藤静江さんという方の詩です。「目立たない一日が終わり起き上がる朝がある。苦しみの一日が終わり起き上がる朝がある。喜びの一日が終わり起き上がる朝がある。目立たない一日が終わり起き上がる朝がある。」この詩は素晴らしい詩だなと思いました。今もウクライナの方たちのなかにはあんな苦しい中でも起き上がる朝がある、といって起き上がる人がいると思います。そういうことを考えるとほんとに素晴らしい詩だなと思っております。世界中の起き上がる朝があるっていうことはみんなそれぞれ目立たない、そして苦しいさや喜びもあるけど生きることを手放さないで起き上がっていることは、私たちは世界中の人たちと連帯してると思ったのです。

実は私、夜間中学に行く前は小学校の音楽専科をして、1年生から全クラスを持ったこともあります。だんだんと学年が上がるにつれ、思春期に差し掛かってきてそれまでは大きな声で歌ってた子が歌わなくなってきたりして、そういう中で思春期にかかる子どもたちと一緒に音楽をやりたいと思ったんです。それで昼の中学校に異動しました。昼の中学校ではちょうど校内暴力が荒れ狂う時でしたので、様々な苦しいことがありました。中でも一番大変だったのは、自分のクラスに毎年、不登校の子がいたのです。一人だけでなく多いときは複数人いました。そういう中で、学校があるから子どもたちを苦しめていると感じるようになりました。そして私だけいい先生でいくらいようと思っても、歯車の一つですから自分だけテストをしないとかそういうことができるわけではありません。私もその手先の一人であるの感じると、これから先生になる皆さんの前で言うのは変ですが、先生をやめようとほんとに思ったのです。それで、でももう1度勉強し直すことはできないだろうかと思ったときに、夜間中学の話を聞いたのを思い出し、夜間中学に行くことができたのです。

苦しみの1日の終わりではないですが、長いこと読み書きができなかったり、そういう苦しみの中にいた人が夜間中学に来たら、本当に目が覚めるような変身をするのです。夜間中学で5月の連休の時に「皆さん明日から連休ですよ」というと、昼間の学校だったらみんな喜ぶのですが、夜間中学校だったらみんながガッカリするのです。ほんとにびっくりしました。学ぶことは喜びなのです。人間って本当は学ぶことが大好きなのです。大好きなだけでなく学ぶこと無しでは人間になれない。今の学校の制度の中で、苦しみや不登校やいろいろな体験をしてる人たちすべてにとって学ぶことは喜びなのです。そのことを私は夜間中学に行ってはっきりと確信を持ちました。

少しややこしい話になりますが、大田堯先生が『百歳の遺言』(編集部註:2018年、藤原書店)という本を書いていらっしゃいますが、その中に中村桂子さんとの対談があります。1人1人の中に環世界というものがあるというお話をされています。ちょうどテーブルの上に大田堯先生の本があって、中村桂子さんが「この本は私にとってものすごく大事なものです。でもここに飛んでるこのハエにとっては何にも意味がない。むしろ隣にあるプリンのほうがハエにとっては意味がある。」というお話をされたのです。本当に1人1人の運命と環世界というものがあるということを私たちは考えないといけないと思います。そのことはほんとに大事なことだと思っております。

私の母は、56歳で癌でなくなってしまったのですが、昨日皆さんにお話ししようと考えたらもう50年も前に亡くなっているんです。私が21歳の時でした。その母はとても面白い人でした。私は手芸をしたりお習字をしたりしてていたのですが、下手だったんです。でも母は、「これは世界に1つしかない留理の作ったものだから、世界に1つしかないんだよ」とよくとても喜んでくれていました。そのことはいつの間にか私の中に住み着いています。焼き物とかでも、窯の中でクシャっとなってしまったものでもそういう良さがあるよと話してくれました。1つ1つのものの中にある価値、1人1人の中にある素敵なものを見つけられるというのは、先生にとってものすごく大事な資質だと思います。私は昨日、皆さんに何をお話ししたいかなと思ったときに、ぜひそのことをお伝えしたいなと思いました。

大田先生は「教育という仕事はものすごく困難だからうまくいくことなんてあるわけがない。失敗ばっかりです。」とおっしゃっていました。皆さんはいい先生になろうと思っていると思うのですが、いい先生になろうと思わなくていいということではなく、失敗することが当たり前、くらいの困難が仕事です。でも、1人1人の中にあるすばらしさを見つけることができればものすごい喜びです。それは私自身もそうだった。世界に1つしかないお習字

が書けたというふうに自分のことも喜べたと思います。抽象的な話で夜間中学の話があまりできなかったですが、以上で終わらせていただきます。

森

皆さんこんばんは。都留文科大学には2009年に大田先生の映画の撮影でお邪魔しました。今日は何をお話ししようかなと思ったのですが、映画を改めて皆さんとみて、映像というのは一緒に見るということがすごく大切で旭川で見た時と今日見た時ではまた違う思いが出てきました。それは、当たり前といえば当たり前ですが、この映画に出てくる人たちが、みんな学校に行きたいとか学びたちとか勉強したいという気持ちがすごくほとばしっているというふうに感じた。なんで映画を撮っているときはそんなことは感じないんだと思われるかもしれませんが、映画を撮っているときはあまり思わないんですね。他のことを考えているからかもしれません。

勉強をしたいとか学校に行きたいとか気持ちという目に見えないもの、言葉でも言い表せないもの。第１作目の「こんばんは」というのは、本当はそれを映画で打ち明けてしまったんです。でもなかなかうまくいかなかったのです。学びたい感情や勉強したい、学校に行きたいという感情は一体何なんだろう。それで私は、小･中･高校･大学と行ったのですが、はっきり言うと学びたいと思って行ったというわけではないんです。当たり前のこととして行っている。私の育った地域では、高校生は大人という形で見られました。学ぶとか勉強するとか意識したことはほとんどない。ところがこの仕事、とりわけ映画をするようになって、映画の中で教育とか学ぶとか、大田先生と出会ったこととかいろいろあり、学ぶということを取り扱うことが多かったのです。

あまり考えはしないのですが、１人１人の存在として、「こんばんは」･「こんばんはⅡ」に出てきた人たちからすごく感じるのです。私の友人でコラムニストがいまして、その彼が夜間中学の題材がないかということで私が撮影した夜間中学を一緒に見学した。その時に朝日新聞に載ったコラムなのですが、夜間中学の学びということで彼がどう見たか紹介したいと思います。学ぶということは卒業や高校受験のためにあるのではない。と彼は言っているのです。本来は学ぶこと自体が楽しいことなんだ。自分の頭で考えて問題を解く楽しさ。アインシュタインでも小学生でも夜間中学生でも変わらないんだ。という彼の文章を読んで私はなるほどなと腑に落ちました。やはり、知らないことを知るとか自分が疑問に思ったことを少しでも手掛かりを掴んでいくということが学ぶということの本質で、別に学校教育や、就職した後の社内教育の中で身に付くものではない。学ぶということ、教育ということ含めて考える一つの手がかりになるのではないかということを思いました。

戎香里菜さんの「学ぶことは生き延びること」という言葉があります。学ぶことは生きること言う言葉はすごく使われています。手あかがつくほど使われていると私は思っています。ただ、多くはスローガンみたいに使われています。しかし、本当はそうじゃなく「学ぶことは生きること」ではなく「学ぶことは生き延びること」こと、命の行いだということを言っているんだろうと思う。この言葉は戎さんがある集会で話をしたときに、「最初は学ぶことは生きること」だと言おうとした。原稿にもそう書いてあったのですが、みんなを前にして本当の自分の気持ちをとっさに言った言葉が「生き延びること」だったそうです。それだけ彼女は壮絶な人生を送ってきています。映画の中で、日本に売られてそこから逃げ出したという話をしているのですが、とても描けないというかすごい人生を送っているのです。その中で生き延びることだけでも精一杯、同時に教育がなければ、ということを彼女は言ってい

ます。やはり、学びということが生きることにつながっているんだと、学ぶことは生き延びることだというふうに私は戎さんの言葉に感じました。

本当そういう方たちがたくさんいる。私はたまたま、1991 年に夜間中学のことを知ってから、夜間中学の方たちに何人もお会いしていろんなお話を聞いてきたので、やはりかなりいるんだなと思いました。同時に歴史的な背景です。例えば東京にいると中国残留孤児やその前の日中平和条約とかがあるのですが、北海道は樺太だと言うんです。戦争が終わり樺太から引き揚げてきた人たちが旭川とか札幌などに行くんです。その人達は学校に行くどころでは無かったりして、それが世代的に続いているんです。そのような話を聞きました。

私たちが生きている時代、社会というのは、私たちが知らないところでそういう方たちがたくさんいる社会なんだということと同時に今の学校教育の矛盾という中で不登校になっている人が 24 万人もいる。そういうことを含んだ社会の中で私たちは生きているのです。学校教育ということはものすごく大切なこと、同時に夜間中学の教育と学びを求める気持ちとは何なんだろう。ということを教師になられた方々は、これからずっと問われていかなければならないと思います。大田先生は、教育というのは本当に大変な生半可なものじゃないとおっしゃられていたが、私から言わせれば私達の仕事こそ生半可なものじゃないと大田先生に返したいのですが、やればやるほどわからなくなってきます。こういうことでいいのだろうか、ほんとに自分は描いているのだろうか。それは教育という形でも映画を作ることでも、小説を書くことでも、研究することでも、工場労働者でも同じことだと思うのです。やはり働くことは生きること、生きることは働くこと。そこでどれだけ誠意をもって１日１日生きていけるのだろうか。ということを考えることと同時に大田先生のお言葉でこれからどう生きるかということだと私は改めて感じました。

邊見

ありがとうございます。それでは質疑応答に移らせていただきたいと思います。まず私から質問をさせていただきたいのですが、クロストークのテーマの３つ目にも出させていただいたのですが、「こんばんはⅡ」には自主夜間、公立夜間につながって、その中での学びの喜びなどが多く語られていたのですが、そもそも生きることに困難を抱えて、学ぶことにも困難を抱えてこられた方が、夜間中学に入ったからといってめでたしめでたしというわけではないと思うのです。やはり夜間中学でも仕事と両立し苦労されながら通う方もいるし、おそらく家族の理解というのも非常に大きいのかなと思います。夜間中学に行ってもそこで頑張り続けることの難しさもあるように思います。澤井さん、関さんにお聞きしたいのですがどうでしょうか。

関

おっしゃる通りです。仕事を終えて学校に来る方で、残業があったり、家族が病気になったりといろんなことがあります。夜間中学に皆さん一日も休まずに来たいのですが、どうしても続けられない日もあります。そういう時に本人は本当に残念だと思い悩んだりしたそうなのです。そうした時に私たち夜間中学の教師たちは「学校はなくならないから、今は少し大変で仕事や家庭の関係で１回やめたとしても、条件が整ったらいつでもまた来てね。待ってるよ」といいます。それがすごく大事なことなのです。やはり夜間中学でも挫折してしまうこともあるのです。夜間中学の学ぶ仲間の中でトラブってしまったりいろんなことがあります。若い生徒の中では既婚者の方に恋をしてしまったことがあったりもしました。それで

勉強などにいろんな意味で挫折してしまうということもあります。本当に多種多様なのです。

本人が一番なぜ学校に行けなくなったか知りたいはずです。それは夜間中学生も同じなのです。今その人が置かれた状況を受け入れるということがとても大事だと私は思います。そんな絵に描いたようにうまくいくことはなかなかないですが、その時、生徒さんも私たち教師も同じ目線でいるそれが一番大事かなと思います。「えんぴつの会」に中学校3年生の女の子が2人いるのですが、その子たちはどうしてか分からないけど、教室に入れないです。何か怖いと感じてしまうのです。「えんぴつの会」も時々休むことがあるのです。風の音とか電車の音とかが疲れのもととなって、だんだんとたまっていくと体が動かなくなってしまうタイプの子たちがいるんです。その子たちに対して私たちは何もしてあげることができません。私がせめてしてあげられることは、相手の話に共感してあげること。そのようにして細い糸を切らないようにしている感じかな。スタッフ全員が、子どもたちのことについての基本的な知識をスタッフのだれもが気をつけるようにして、来てくれた時には「よくきてくれたね、待ってたよ」とかを声掛けをしていました。別に言葉かけをしなくてはいけないとか本に書いてあったというわけでなく、自然とそういう言葉が出てきました。そのような繰り返しで信頼関係ができてくるのかなと思います。

邊見

ありがとうございます。質問がたくさん来ておりましたので、次の質問に移らせていただきます。「読み書きができない人、会話がままならない人など、多くの困難を抱える人がいる中で夜間中学または自主夜間中学に最初につながるきっかけを作るにはどのようなことをされていますか。」という質問がありました。

澤井

これまさにポイントなのですが、東京都内には8校の公立夜間中学があり様々な工夫をしています。足立区の第4中学校というのはスカイツリーラインの梅島という駅にあるのですが、そこの学校の屋上には大きな横断幕で「夜間学級設置校」と書いてあります。スカイツリーラインに乗ればだれでも目に留まります。それを何十年もあの学校にいつか行くと思って見ていた人もいます。荒川区でも通りに面した道で看板に「夜間中学があります。いつでも相談に来てください。」という看板があります。

そのように、あらゆる手段で夜間中学のことを皆さんにお知らせするというのが鍵です。先ほど塚原雄太先生の話でもありましたが、子ども電話相談室というラジオ番組があったのですが、その名回答者だったのです。そのいろんな回答者がいる中で、塚原先生は必ず「夜間中学の塚原です。」と言って子どもたちの質問に答えました。あらゆるところで夜間中学の宣伝をしなければだめなのです。どんなチャンスでも夜間中学のことで話しをする機会があれば絶対に断ってはダメだ。恥ずかしがっていないでどんどん宣伝しなさい、と私は夜間中学にいたころに教えてもらいました。

邊見

今皆さんのお手元にある本日のプログラムの裏面がちょうど今回の作品「こんばんはⅡ」の情報が載っているものになります。次の質問は関さんにお答えいただくのがよいかと思うのですが、「コロナ禍の自主夜間中学はどういった活動をされましたか」という質問です。

関

鎌倉「えんぴつの会」は昨年の4月に設立されたばかりで、今のところ6人の生徒がいます。市の、おもに福祉センターを借りているのですが、わりと広い所なので、1回も休まずに開催することができました。しかし他の夜間中学では、借りている場所が閉鎖になってしまい、やりたくてもできないような状況が続いていたと聞いています。なので、小さい社会だからできたという感じです。

澤井

公立の夜間中学では、一斉休校ということもありました。オンラインで行っていたところもあると聞いています。夜間中学は本当に大変なのです。そういう意味ではとても苦しい時期もありました。それから皆さんはご存じないかもしれませんが、日本に2校だけ通信制の中学があります。大阪に1校あり、そこは全国からは入れるのですが、卒業証書が貰えないのです。例えば刑務所の受刑者の方とかが勉強していると聞いています。

もう1校は東京の神田一橋中学校というのがあります。そこは9教科の勉強ができて、卒業証書が貰うことができます。毎日通うことはできないけど日曜日に月に2回ほど行って、授業を受けるということができるので、勉強したいという通信制中学の需要が大きいものが今後あると思います。北海道に初めて出来た公立夜間中学は、広い北海道に1校です。それで義務教育を終えていない方がそこに通いきれるはずがありません。コロナ禍の話ではないのですが、これからきめ細かく義務教育を終えていなかったり、学び直したい方たちと勉強していくには様々な工夫をしていかなくてはならないと思います。それは本当に始まったばっかりでこれからの研究課題となっております。

邊見

ありがとうございます。たくさん質問が来ていますが、時間がないため次々行かせていただきます。「さまざまなマイノリティ性を持つ生徒と関わる際に気を付けていることはありますか」との質問が来ております。置かれた状況や背景も違う生徒たちに関わるなど昼間の中学校以上に多様な生徒たちと関わることになると思うのですが。いかがでしょうか。

澤井

日本語がまだあまり話せない学生も踏まえて、週に1回の音楽の授業をどうやるかって考えるとすごく大変です。それで半分日本語みたいな授業をしたり、いろんなことをしますが、実は、不思議なことに21年間夜間中学で音楽の勉強をしてきましたが、どの国の人でも、また、どの年齢の人でもとても良いという教材があるのです。それはいくつもないのですが、なんと演歌なのです。昼間の中学にいるときに仲の良い先生に「澤井先生カラオケくらい行かなくちゃだめよ」と言われやっと行ったくらいの人間なので、まったく演歌を知らなかったのです。ほんとにネパールの若い生徒や中国のおばあちゃんたち、日本の高齢者の生徒も星影のワルツとか好きですよ。いろんなマイノリティといっても全部違うじゃないですか。だけども人間にとって価値のあるというかハートに直撃するようなことってあるのです。配慮というのも比較してこっちはダメとか、そういう扱いは差別とかになるのでだめですね。1人1人が喜ぶ顔を見つけるということが大事かなと思います。

関

まずは比べないということですね。何か足りないとしても別にそれがどうしたのという感じでこちらがいるということがすごく大事だと思います。東京の方の「えんぴつの会」で1年に1回みんなが学習の成果を表現しあって楽しもうという会があります。そうするとさっきの西村さんなのですが、西村さんも何かするわけです。何をしたかというと渋谷のハチ公の話を10ページぐらいの絵本で5行くらいの物語で書いたんです。それを紙芝居に仕立てて西村さんが紙芝居の後ろに書いてある5行くらいの物語を読んでいくというのがありました。それがすごく良かったのです。西村さんはすごく練習して。ハチの境遇に心を入れて楽しまれたのです。同じ物語を何回も読んで楽しまれました。その時その人ができることをして、受け止める人の存在があれば、マイノリティとかあまり考えなくていいんじゃないかと思います。その人のベストでやるというのが大切だと思います。

森

マイノリティの話でいくと、性的マイノリティとありますし、病気とかありますし、全部がそうなんですね。ただ特別な配慮というのは、私が見た限りしてないと感じた。それはやはり、夜間中学の精神につながっているのではないかと思うのです。夜間中学の精神って何なんだと思うかもしれませんが、塚原雄太先生は要約すると「目の前に車にはねられて血みどろがあった子どもがいた時にあなたならどうしますか。運転手を責めるのか道路の少なさを憤るのか。まずは救急車を呼ばなければならないでしょう。夜間中学もそうなんです。目の前に義務教育を終わってない子どもや学びなおしたい人がいる場合に教師だったらどうするんだと。それは勉強を教えなければならないだろう」というのが夜間中学の根本にある精神です。

私が実際、夜間中学を撮っているときに、中国から来られた方が撮影させてくれて、次の日の昼前にその人が血みどろになって学校に来ました。その時、中学の先生方は救急車を読んだりお手洗いに連れて行ったりと見事に連携が取れていたのを目撃したんです。それは生徒を守ると同時に一緒に学んでいるという現れが具体的な形として目に見えたと感じました。そういう意味では多様性とか違いというのをお互いに認め合う、というのが実践的にあることなんだと思いました

邊見

ありがとうございます。マイノリティの問題などを考える前に、まずは目の前に困っている人がいたら助けるといった貫き通さなければいけない夜間中学の精神があるのだと感じました。

森

マイノリティは概念ではない。人そのものなんです。概念としてのマイノリティというわけではなく、1人1人をどういう風に自分は向き合っていくのか。これは社会にとってもものすごく大切なことだと思う。

邊見

ありがとうございます。非常に盛り上がってきたところかと思うのですが、時間の都合上こちらで締めさせていただきたいと思います。皆様、改めてお三方に拍手をお願いいたします。

Ⅲ－２．各種講座の開催

Ⅲ－２－１．都留文科大学現職教員教育講座

講座の趣旨

令和４年７月25日（月）に、都留文科大学夏季集中講座として「現職教職員教育講座」を開催した。

この講座は、山梨県総合教育センターが開催している「中堅教諭等資質向上研修（10年経験者研修）」の選択講座として、同センターとの共催で例年実施しているもので、平成30年度より、午前の部に『教育現場におけるユニバーサル・デザインの利用』、午後の部に『道徳性の涵養』の２講座を開講する形で実施している。

令和４年度は、新型コロナウイルス感染症防止対策を講じ開催した。午前の部を学校教育学科の山本剛特任教授、午後の部を教職支援センターの宮下聡特任教授が担当し、県内各地の小中学校及び高等学校の教員から、午前の部31名、午後の部31名が受講した。

日程と内容

日　　時　：　令和４年７月25日（月）
会　　場　：　都留文科大学　自然科学棟１階S1教室

9時40分～10時	**午前の部　受　付**
10時～12時	**『教育現場におけるユニバーサル・デザインの利用Ⅰ』** **講師：山本　剛（学校教育学科特任教授）** **内容：全校種の教員を対象に、特別な配慮の必要な児童生徒の特徴と、ユニバーサル・デザイン等の利用が、普通の児童生徒にもわかりやすい授業となることについて。**
12時～13時	**休　憩（昼　食）**
12時40分～13時	**午後の部　受　付**
13時～15時	**『道徳性とその涵養Ⅰ』** **講師：宮下　聡（教職支援センター特任教授）** **内容：全校種の教員を対象に、道徳性とは、その涵養の方法等について、また、学習指導要領の目指すもの等について。**

（文責：事務局）

Ⅲ－２－２．都留文科大学子ども公開講座

「子ども公開講座」は、都留市教育委員会の「放課後子ども教室」事業との連携により、本学の市民公開講座の一環として、平成 25 年度から本格的に開始された。対象となるのは、放課後子ども教室に参加している小学生で、夏休み・冬休みの期間や休日に、主として大学内を会場として開催されている。

令和４年度は７月から 12 月にかけて８つの講座を企画し、すべてを開催することができた。その状況は下記の通りである。

令和４年度子ども公開講座参加人数一覧

※参加者数には、保護者及び引率指導員等を含む

日程	講座タイトル	講師名	実施場所	参加者数
7 月 17 日（土） 9:30 ～ 11:30	佐野夢加のかけっこ教室	佐野夢加	体育館	18 名
7 月 30 日（土） 10:00 ～ 12：00	木工教室	青木宏希 竹下勝雄	美術棟	9 名
7 月 31 日（日） 10:00 ～ 12:00	陶芸にチャレンジ	山本直紀 小俣英彦	美術棟	15 名
8 月 16 日（火） 10:00 ～ 11:30	色の不思議　カラフルレインボータワーを作ろう	山田暢司	自然科学棟	12 名
9 月 3 日（土） 13:30 ～ 15:00	ユーチューバーになろう ～ロイロノートで作るむかし話チャンネル～	野中潤	5号館101教室	18 名
9 月 24 日（土） 10:00 ～ 11:30	手作り石鹸やキャンドルを作ろう	平和香子	1号館105教室 （調理実習室）	13 名
9 月 24 日（土） 13:00 ～ 14:30	手作り石鹸やキャンドルを作ろう	平和香子	1号館105教室 （調理実習室）	16 名
12 月 3 日（土） 10:00 ～ 11:30	自然とのふれあい	北垣憲仁	大学周辺の森	16 名

令和５年度も都留市教育委員会からの要望に応じて、様々な講座を開催する予定である。

（文責：事務局）

Ⅲ－３．学部共通科目の開講
Ⅲ－３－1.「地域交流研究Ⅰ」

前年度に引き続き、講義と平行して履修生による地域交流事例調査を実施した。

地域交流研究の概念・理念については、地理学、人類学および地域研究の文献を中心に講義した。

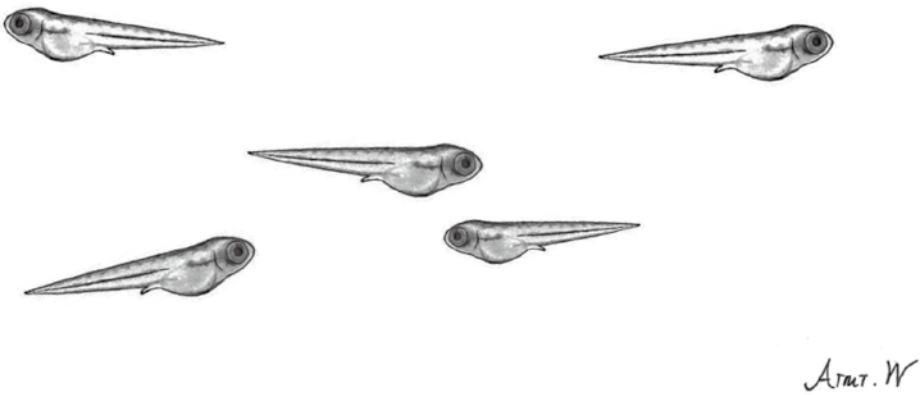
島嶼や海域の事例をとりあげて、「地域」が行政枠を超えて存在し、また重層的複合的かつ可変可能な枠組みであることを理解してもらうよう努めた。黒人奴隷貿易の事例を通して「地域が剥奪される」ことと「地域を創出する」ことについても考察してもらった。災害と復興に置き換えて考えた意見や「地域」は所与の条件ではないことへの気づきなどが履修生から寄せられた。「地域」が生成変化するものである点について一定程度の理解が得られたと思われる。

講義と並行して履修生は各自の関心に沿って地域を特定し、地域交流事例を調査して報告書を作成した。報告書作成に際してはグループを編成し、アドバイスを出し合ったり進捗状況を紹介し合ったりする形式にして孤立作業にならないように努めた。報告書の作成後は、グループ内でそれぞれの報告書を読み合い講評をする機会を設けた。

調査対象となった地域は北海道から沖縄まで様々で、海外（オーストラリアのケアンズ）地域もある。

出身地域をとりあげた報告書が最も多かったが、旅行などで関心を持った地域についての調査も３割にのぼった。地域開発や地域振興、市民参加などに関連した交流活動の他に、祭事や慣習・儀礼に関する交流をとりあげたもの、地域社会の生成過程に着目したもの、地域住民間の関係に着目したものなどユニークなものが散見された。履修生たちは報告書をグループ内で読み合うことにより、「地域交流」の幅広さや面白さをあらためて確認できたのではないだろうか。

（文責：重冨惠子）



Ⅲ－３－２.「地域交流研究Ⅱ」－生きもの地図をつくる－

地域交流研究Ⅱでは、2011年より前期に「生きもの地図を作る」をテーマに、身近に見られる生きものの分布調査を実施している。定量的な調査をおこなうことで、季節の変化にともなう生きものの動態を把握し、ここで得られた情報を地域に公開する手法を学び、生きもの地図が地域交流に果たす役割を考察することが授業の目的である。

2022年は対面授業であったため、教室の机の数から受講生の人数を20名程度に調整した。20名ほどでツバメ、イワツバメ、ハルゼミ、カエル類の調査を実施した。6班（1班は3～4名ほど）にわかれて調査をするが、例年、事前に用意した簡易図鑑を配布し、生きものに詳しくない学生にもデータが取れるように配慮している。

生きもの地図を作るにあたっては、対象とした種の識別とその生きものがいつ、どこに、どのくらいいたのかを把握することが重要になる。種名が不確かで数量的な記録を伴わないデータは情報量が乏しい。そのため、調査対象の種を正確に識別し、個体数を記録することが重要である。

この授業では野外に出て調査をすることに重きを置いている。生きものに関する知識は、本やインターネットを介して、室内に居ながらにして触れることができるが、自分の足を使って得た情報はとても大事で、直接的な多くの学びはこのような経験のなかにあると考えるからである。受講した学生には、大学周辺の身近な自然に触れ、その意味を考える時間を持ってもらいたいと願っている。

野外での調査を通して調査対象を知り、調査結果から明らかになったことを理解し、その成果を公開することには、どのような意味があるのだろうか。自分たちが行なった調査から得られた情報を多くの人々に知ってもらうための工夫の仕方、その楽しさ、重要さに気づいていただけたら幸いである。

2022年は、2021年に引き続きカエル類の調査が実施できた。ツバメ類やハルゼミについては、これまでの結果と大きな違いはなかった。しかし、カエル類の分布調査では、トノサマガエルは1箇所でしか確認できなった。調査対象としたカエル類は水田で見られるものがほとんどであるため、確認箇所の減少は土地利用の変化によるものであろう。トノサマガエルは個体数の減少が著しい種であり、環境省と山梨県のレッドデータブックでは準絶滅危惧種となっている。なお、山梨県のレッドデータブックでは、県東部からの本種の生息記録は記載されていない。

今後は希少種や外来種の分布状況についても調査を行ない、その結果を学内はもとより都留市内にも広く公開していきたいと考えている。

（文責：西 教生）

Ⅲ－３－３.「地域交流研究Ⅲ」

地域交流研究Ⅲは、都留市域に限定してその域内に存在する様々な「地域交流」について学生自らが調べ学習することを主眼としている。

令和４年度の調査テーマは、神社・寺院を起点とした地域の地域交流とした。

図書館所蔵の都留市社記などを参考に都留市内の神社や寺院の分布などを確認したのち、履修生各自の関心に従って神社グループと寺院グループに別れ、さらに４名～３名体制で班分けを行った。

班毎にいくつかの神社や寺院を参拝してもらった後、対象寺社を絞り込んで調査を開始した。

参拝については、現地に足を運ぶことで、調査対象の寺社がある地域がどんなところなのか肌で感じられると考えたからである。授業では宝、東桂、古川渡、田野倉なども含めて広く寺社を紹介したものの、しかしながら結局、履修生たちにとってアクセスしやすい地区に調査が集中するという、少々残念な結果となった。調査対象となった寺院は、龍石寺（上谷）、桂林寺（金井）、保寿院（四日市場）の３院で、神社は金毘羅神社（上谷）、小篠神社（十日市場）、金山神社（上谷）、生出神社（四日市場）の４社である。

事前調査では、起点とする寺社について縁起を含めて調べた。事前調査をする中で得た班員の関心や気づきをもとに、本調査では地域社会について地理や歴史などを含めて調べなおし、またそこにどのような「交流」が存在しているのか調査した。寺院を担当した３班は、寺院が実施している交流活動から出発し、調査を通して地区や地域住民を巻き込んだ交流の存在を明らかにできた。神社を担当した４班は、地区の成り立ちや経済活動、また神楽を手掛かりにして地域の特徴や交流活動について調査することができた。幸い後期開始時期には、図書館で神楽保存会による各地域の神楽の様子がパネル展示されており、履修生たちのよい刺激になった。

今年度、履修生たちは、神主様やご住職様をはじめとして、神楽保存会、自治会、商店街の皆さまなど地域の方々からの多大な厚意により、直接お話しを伺う機会を得ることができた。失礼な点もあったかとは思うが、快く対応していただいたことに心より感謝を申し上げねばならない。そして覚悟を決めて現地に出向いた履修生たちの積極性も高く評価したい。

報告書自体はレイアウトを含めて拙いものではあるが、何の予備知識もない都留市外からやってきた１年次生たちの成果として、今年度は１冊にまとめることができた。今後も、履修生たちが地域を調査した結果を蓄積していきたい。

（文責：重冨惠子）

Ⅲ－３－４.「地域交流研究Ⅳ」―地域の自然を観察し記録する―

これまでの経緯

2020 年度まで「地域交流研究Ⅳ」は、地域の自然や文化をテーマとした観察･記録を行い、それを記事にまとめるという授業をしてきた。地域での体験を言語化し、それを互いに読み合い、最終的には冊子として市民に届けることで学生の地域についての学びを深め、市民との交流を生み出すことを目標とした。この授業は、地域交流研究センターの『フィールド･ノート』の実践を参考にして行った。

2021 年度から文学部 3 学科横断履修モデルの科目として位置づけられたこともあり、「地域を観察し記録する」という目標は保ちつつ、地域交流研究センターのフィールドでもある富士山北麓の動物を含む地域の身近な自然の理解をテーマとした授業構成とした。

今年度もキャンパス周辺でのフィールド・ワークを取り入れたため、受講者を 36 名に調整し授業を行った。

科目概要

地域交流研究センターがフィールドとする本学を含む富士北麓地域の自然環境を対象に、地域を理解するとはどういうことかを具体的な事例をもとに考察することをテーマとした。授業ではじっさいにキャンパス周辺の自然に触れ観察し親しむことから始め、動物の生活痕（食べ痕や糞、足跡など）から森と動物との関係性について理解を深める授業内容とした。特に全国的に農業や林業など環境面だけでなく社会的な問題にもなりつつあるニホンジカやイノシシなど大型哺乳類との共存の課題には地域住民との交流を重ね解決を図る取組が欠かせない。自然に親しみ、生きものの関係性に着目して自然の仕組みへの理解を深め、地域の自然の課題を市民との交流を通して解決していくにはどうしたらよいかを考察することに重点を置いて授業を展開した。また、本授業での経験を含めた自然への理解を、卒業後の生活にも活かせる「生きた学び」、つまり地域の中での事象や活動に直接触れることで、地域・技能を生活の中で活かすことができる学びを体験し、学びを深めることを目指した。

授業後、次のような感想が寄せられた

- ふだん気にかけていなかった部分に目を向けるようになりました。
- 勉強として習って終わりではなく、この先ずっと取り組んでいけるようなものを学び得た。
- フィールドワークがあったことで、環境についてより深く学ぶことができた。
- フィールドワークで実際に生き物に触れることができたので環境を守ることの大切さがより理解できた。
- 講義だけでなく、フィールドワークの中で概念について目で見て学ぶことができたので、言葉が生きた知識として身についたように感じる。

来年度（2023 年度）もキャンパス周辺でのフィールド・ワークを取り入れて授業を実施する予定である。受講生のなかにはフィールド・ワークをするにはまだ受講者数が多いように思うという感想も寄せられている。できる限り多くの学生の受講希望を受け入れながら、より身近なキャンパス内の自然についても授業で扱えるよう準備をしたい。

（文責：北垣憲仁）

Ⅳ．地域貢献活動

Ⅳ－１．山梨県南都留地域教育フォーラム

概　要

南都留地域教育フォーラムは、「地域の子どもたちは、地域で育てる」という基本理念のもと、この地域の教育関係者が一堂に集まり、『連携活動』『交流活動』を軸に、報告と意見を述べあう場として開催されている。毎年、教育委員会・校長会・教頭会のほか、各学校・幼稚園･保育園やＰＴＡ及びＰＴＡ連絡協議会、保育所保護者会、青年会議所、商工会議所、商工会など数多くの団体の参加者によって、様々な立場からの意見交換を行い、今日的な課題への対応や解決を目指す機会となっている。

令和４年度はコロナ感染症対策をとりつつ参集型での開催となった。全体会と２つの研究会を実施し、５つの実践提案とパネルディスカッションを行った。 研究会①では、「幼保小連携と行政・地域連携」のテーマで、忍野幼稚園と、NPO 法人にじいろのスイミーから２つの実践提案が行われた。 研究会②では、「行政・外郭団体と小中高の連携」のテーマで、富士吉田市立教育研修所、富士山科学研究所、NPO 法人ぐんないやから３つの実践提案が行われ、その後のパネルディスカッションでは活発な意見交換が行われた。

令和４年度は、10 月 28 日（金）に参集型で開催した。

令和４年度「南都留地域教育フォーラム」全体会テーマ一覧

全体会 新しい結びつきで広がる教育の可能性	研究会①　幼保小連携と行政・地域連携 ～幼年期から小学校の子どもたちを中心に～ ・忍野幼稚園　教諭　渡辺美子 ・NPO 法人にじいろのスイミー　事務局長 三枝里実 提案者：小俣一夫（教職支援センター特任教授） 助言者：山本　剛（学校教育学科特任教授）
	研究会②　行政・外郭団体と小中高の連携 ～小中高の子どもたちを中心に～ ・富士吉田市立教育研修所 所長 村松 悟 ・富士山科学研究所 主幹 篠原 良典 ・NPO 法人ぐんないや　理事長　耕雲院副住職　河口智賢 助言者：北垣憲仁（地域交流研究センター教授） 別宮有紀子（学校教育学科教授）

（文責：事務局）

Ⅳ－２．都留市放課後子ども教室事業

１．「都留市放課後子ども教室」事業について

本事業は、文部科学省の「子どもの居場所づくり事業」（平成 16 年度）および「地域教育力再生プラン」（平成 17・18 年度）を発展的に引き継ぎ、都留市子ども教育連絡協議会を推進主体として、都留市教育委員会生涯学習課が事務局を担って実施している事業である。6 つの小学校区（谷村第二、東桂、宝、禾生第一、禾生第二、旭）を中心に、学校の図工室や、各地区のコミュニティセンター等に安全・安心に活動できる拠点を設け、地域の住民、大学生、社会教育関係者などを活動指導員として配置し、放課後や週末などにおける遊び、スポーツ、体験活動、学習支援などの活動を行っている。

２．令和４年度の活動状況

地域交流研究センターでは、都留市教育委員会からの依頼を受け、活動指導員として協力してくれる学生を募集している。平成 27 年度までは、個々の活動ごとに募集をかけて学生が直接申し込む形式だったが、申し込みの多い活動と、少ない活動に分かれてしまい、調整が難しかった。

そこで平成 28 年度からは、センターが活動指導員として参加を希望する学生をあらかじめ募集して登録を行い、申告してもらった特技や趣味等から、個々の活動の際に教育委員会が適当な学生に直接参加を依頼する、という方法を取ることになった。

令和 4 年度は 55 名の学生から参加申し込みがあり、放課後子ども教室事業で行われた 214 回の活動のうち、53 回の活動に延べ 306 名の学生が参加し、子どもたちをサポートした。

令和４年度放課後子ども教室学生参加状況一覧

「三吉子ども体験教室」（谷村第二小学校）

	開催日	活　動　内　容	活　動　場　所	学生
1	6月29日	自由遊び	多目的ホール	3 名
2	7月17日	文大子ども公開講座（1 ～ 3 年生） ロンドンオリンピック選手と走ろう 佐野夢加のかけっこ教室！	都留文科大学	2 名
3	7月30日	文大子ども公開講座（1 ～ 3 年生） 木を使って工作をしよう！	都留文科大学	5 名
4	7月31日	文大子ども公開講座 (4 ～ 6 年生) 陶芸にチャレンジ！	都留文科大学	6 名
5	8月16日	文大子ども公開講座（4 ～ 6 年生） 色の不思議	都留文科大学	4 名
6	9月 3 日	文大子ども公開講座（全学年） ユーチューバーになろう！	都留文科大学	2 名
7	9月14日	パラリンピック競技 ボッチャを体験してみよう！	体育館	2 名

8	9月24日	文大子ども公開講座（1～3年生） 手作り石鹸やキャンドルを作ろう！	都留文科大学	8名
9	9月24日	文大子ども公開講座（4～6年生） 手作り石鹸やキャンドルを作ろう！	都留文科大学	8名
10	10月22日	つる子どもまつりがやってくる	体育館	21名
11	12月3日	文大子ども公開講座（全学年） 自然とのふれあい	都留文科大学	
12	12月21日	お正月遊びを体験しよう 俳句カルタで楽しもう！	多目的ホール	1名
13	1月25日	ばんちょと遊ぼう	グラウンド	1名
	合計①			63名

「桂子ども教室」（東桂小学校）

	開催日	活　動　内　容	活　動　場　所	学生
1	5月22日	にじいろきょうしつ 【文大生と紙ひこうき大会】	東桂小体育館	5名
2	6月25日	つる子どもまつりがやってくる！！！ 【たべもののクイズとお道具箱こうさく】	東桂小体育館	21名
3	7月17日	にじいろきょうしつ 【水遊びをしよう！】	東桂小体育館 玄関前広場	12名
4	7月17日	文大子ども公開講座 ロンドンオリンピック選手と走ろう！	都留文科大学	2名
5	7月27日	増田展に向けた絵画の制作	東桂小1-1教室	1名
6	7月27日	増田展に向けた絵画の制作	東桂小1-2教室	2名
7	7月30日	文大子ども公開講座 木を使って工作をしよう！	都留文科大学	5名
8	7月31日	文大子ども公開講座 陶芸にチャレンジ！	都留文科大学	6名
9	8月1日	夏草を摘んでアレンジメント	代替コミセン　古渡	1名
10	8月16日	文大子ども公開講座 色の不思議	都留文科大学	4名
11	8月19日	大根の種まき	畑	3名
12	8月22日	ミサンガを作ろう！（学童合同活動）	東桂学童教室	3名
13	9月3日	文大子ども公開講座 ユーチューバーになろう！	都留文科大学	2名
14	9月24日	文大子ども公開講座 手作り石鹸やキャンドルをつくろう！	都留文科大学	8名
15	9月24日	文大子ども公開講座 手作り石鹸やキャンドルをつくろう！	都留文科大学	8名

16	9月29日	おもいきり遊ぼう！ ～リズム遊びを楽しもう！！～ (学童合同活動)	東桂小グラウンド	1名
17	10月17日	科学で遊ぼう ～切って作って実験しよう！！～	代替コミセン	2名
18	10月31日	ペットボトルランプを作ろう！	代替コミセン	2名
19	12月 3 日	文大子ども公開講座 大学のキャンパスで木の実を集めよう！	都留文科大学	
20	1月15日	にじいろきょうしつ 【文大生とお正月遊び】	東桂小体育館	6名
	合計②			94名

「宝っ子クラブ七里」(宝小学校)

	開催日	活　動　内　容	活　動　場　所	学生
1	7月17日	文大子ども公開講座 ロンドンオリンピック選手と走ろう！	都留文科大学	2名
2	7月27日	芸術はばくはつだ！ ～ねんどにちょうせん～①	宝小図工室	2名
3	7月30日	文大子ども公開講座 木を使って工作をしよう！	都留文科大学	5名
4	7月31日	文大子ども公開講座 陶芸にチャレンジ！	都留文科大学	6名
5	8月 8日	つるっこ探検隊 【びしょぬれ！！夏の大運動会！！】	宝小グラウンド	18名
6	8月16日	文大子ども公開講座 色の不思議	都留文科大学	4名
7	8月18日	都留文大こまつり企画【アイス棒工作】 (学童合同活動)	多目的ホール	1名
8	8月24日	都留文大こまつり企画【プラバン】	多目的ホール	2名
9	9月 3 日	文大子ども公開講座 ユーチューバーになろう！	都留文科大学	2名
10	9月24日	文大子ども公開講座 手作り石鹸やキャンドルを作ろう！	都留文科大学	8名
11	9月24日	文大子ども公開講座 手作り石鹸やキャンドルを作ろう！	都留文科大学	8名
12	10月19日	ボードゲームで遊ぼう (学童合同活動)	宝小体育館	7名
13	10月29日	さつまいも、大根、里いも、こんにゃくいもの収穫	畑	1名
14	11月 5 日	収穫の儀式、焼き芋	畑	2名

15	11月14日	ハンカチきんちゃくを作ろう！ (学童合同活動)	多目的ホール	1 名
16	11月26日	つる子どもまつりがやってくる！！！	宝小体育館	20 名
17	12月 3 日	文大子ども公開講座 大学のキャンパスで木の実を集めよう！	都留文科大学	
18	1月11日	宝の山の番長と遊ぼう！ (学童合同活動)	宝小グラウンド	4 名
	合計③			93 名

「禾一わくわくクラブ」(禾生第一小学校)

	開催日	活　動　内　容	活　動　場　所	学生
1	6月12日	つる子どもまつりがやってくる！ (禾一・旭合同)	禾一小体育館	21 名
2	7月 2 日	つるっ子　エンジョイ夏祭り (禾一・禾二合同)	禾一小体育館	21 名
3	7月13日	ばんちょと外遊び　1・2 年生 (学童合同)	都留文科大学	4 名
4	7月17日	文大子ども公開講座 ロンドンオリンピック選手と走ろう！ ～佐野夢加のかけっこ教室～	都留文科大学	2 名
5	7月30日	文大子ども公開講座 木を使って工作をしよう！	都留文科大学	5 名
6	7月31日	文大子ども公開講座 陶芸にチャレンジ！	都留文科大学	6 名
7	8月16日	文大子ども公開講座　色の不思議 カラフルレインボータワーを作ろう	都留文科大学	4 名
8	9月 3 日	文大子ども公開講座 ユーチューバーになろう！ ～ロイロノートで作るむかし話チャンネル～	都留文科大学	2 名
9	9月24日	文大子ども公開講座 手作り石鹸やキャンドルを作ろう	都留文科大学	8 名
10	9月24日	文大子ども公開講座 手作り石鹸やキャンドルを作ろう	都留文科大学	8 名
11	10月26日	ばんちょと遊ぼう！	禾一小グラウンド	2 名
12	12月 3 日	文大子ども公開講座 自然とのふれあい	都留文科大学	
	合計④			83 名

「禾二っ子クラブ」（禾生第二小学校）

	開催日	活　動　内　容	活　動　場　所	学生
1	6月17日	ホタルの観察会	小形山周辺	12 名
2	6月18日	ホタルの観察会	小形山周辺	18 名
3	6月26日	ホタルの観察会	小形山周辺	8 名
4	7月 2 日	つるっ子　エンジョイ夏祭り （禾一・禾二合同）	禾一小体育館	21 名
5	7月17日	文大子ども公開講座 ロンドンオリンピック選手と走ろう！ ～佐野夢加のかけっこ教室～	都留文科大学	2 名
6	7月30日	文大子ども公開講座 木を使って工作をしよう！	都留文科大学	5 名
7	7月31日	文大子ども公開講座 陶芸にチャレンジ！	都留文科大学	6 名
8	8月16日	文大子ども公開講座　色の不思議 カラフルレインボータワーを作ろう	都留文科大学	4 名
9	9月 3 日	文大子ども公開講座 ユーチューバーになろう！ ～ロイロノートで作るむかし話チャンネル～	都留文科大学	2 名
10	9月21日	ばんちょと遊ぼう！　1・2 年生 （学童合同）	禾二小グラウンド	2 名
11	9月24日	文大子ども公開講座 手作り石鹸やキャンドルを作ろう	都留文科大学	8 名
12	9月24日	文大子ども公開講座 手作り石鹸やキャンドルを作ろう	都留文科大学	8 名
13	10月12日	ばんちょと遊ぼう！	禾二小グラウンド	2 名
14	12月 3 日	文大子ども公開講座 自然とのふれあい	都留文科大学	
15	1月18日	ばんちょと遊ぼう！　3・4 年生	禾二小グラウンド	2 名
	合計⑤			100 名

「旭子ども教室」（旭小学校）

	開催日	活　動　内　容	活　動　場　所	学生
1	5月25日	さつまいもの苗さし	旭ファーム	4 名
2	6月12日	つる子どもまつりがやってくる！！！ （禾一と合同）	禾一小体育館	20 名
3	6月22日	ミニアルバムを作ろう♪	盛里コミセン別館	4 名
4	7月 8 日	じゃがいも堀り	旭ファーム	1 名

5	7月17日	文大子ども公開講座（1～3年生） ロンドンオリンピック選手と走ろう 佐野夢加のかけっこ教室！	都留文科大学	2名
6	7月30日	文大子ども公開講座 木を使って工作をしよう！	都留文科大学	5名
7	7月31日	文大子ども公開講座 陶芸にチャレンジ！	都留文科大学	6名
8	7月31日	エンジョイ！文大生と夏祭り (旭と与縄合同)	旭小体育館	11名
9	8月16日	文大子ども公開講座（4～6年生） 色の不思議	都留文科大学	4名
10	9月3日	文大子ども公開講座（全学年） ユーチューバーになろう！	都留文科大学	2名
11	9月21日	ゲーム遊び色々	与縄営農センター	2名
12	9月24日	文大子ども公開講座（1～3年生） 手作り石鹸やキャンドルを作ろう！	都留文科大学	8名
13	9月24日	文大子ども公開講座（4～6年生） 手作り石鹸やキャンドルを作ろう	都留文科大学	8名
14	10月12日	文大のお兄さんやお姉さんと遊ぼう♪ (学童と合同)	盛里コミセン別館	4名
15	11月9日	文大のお兄さんやお姉さんと遊ぼう♪ (学童と合同)	旭小体育館	4名
16	11月30日	大根堀り	旭ファーム	4名
17	12月3日	文大子ども公開講座（全学年） 自然とのふれあい	都留文科大学	
18	12月7日	クリスマスオーナメント作り (学童と合同)	盛里コミセン別館	4名
	合計⑥			93名

(①＋②＋③＋④＋⑤＋⑥) 合計⑦	526名

（文責：事務局）

Ⅳ－３．文大ボランティアひろば

１．文大ボランティアひろばとは

文大ボランティアひろば（通称：ボラひろ）とは、地域交流研究センターと都留市社会福祉協議会との話し合いの中から生まれた「ボランティアをとおして交流できる場」のことである。平成 20 年度から１ヵ月に１回のペースで開かれており、本学のボランティアサークルを中心に、地域交流研究センターと社会福祉協議会の職員やボランティアの協力を呼びかけたい地域の方が参加して、緩やかな連絡協議会的な会合を行っている。昨年度から引き続き令和２年度、３年度のボランティアひろばは、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため開催できなかった。

令和４年度から、新たな形でボランティア事業を再始動した。地域交流研究センターに学生ボランティア登録をしてもらい、事務局からボランティア募集のお知らせや、ボランティア講座、文大ボランティアひろば開催のお知らせを随時メールにて周知した。学生は参加したい時に申し込みを行い、社会福祉協議会への登録を許可した学生については、社会福祉協議会のデータベースにも登録した。令和４年度の学生ボランティア登録者は 180 名であった。文大ボランティアひろばについては、１ヵ月に１回、12 時 30 分～ 13 時の 30 分に限定し、地域交流研究センターや社会福祉協議会からのボランティア募集の告知、登録者同士の交流する場として実施した。実施日は下記のとおりである。第６回目からは、社会福祉協議会から地域でボランティア活動をしている方にお声掛けいただき、代表者の方にお越しいただいた。実際に行っているボランティア活動内容の様子や、質疑応答など、直接話を聞くことのできる貴重な時間となった。

第１回　５月 12 日（木）1405 教室　参加者 15 名
第２回　６月６日（木）1215 教室　参加者 10 名
第３回　７月７日（木）1216 教室　参加者７名
第４回　10 月６日（木）地域交流研究センター　参加者４名
第５回　11 月 10 日（木）地域交流研究センター　参加者５名
第６回　12 月 15 日（木）地域交流研究センター　参加者４名
　　ゲスト：絵本の読み聞かせボランティア「こぶたの会」代表の小松かおりさん
第７回　2023 年１月 19 日（木）地域交流研究センター　参加者３名
　　ゲスト：「コーヒーボランティア」として活動をされている知念淳一さん
　　参加者：精神疾患やメンタル不調を経験された方の経験をアートにする活動に取り組んでいる「株式会社パパゲーノ」の赤坂智美さん

２．今後の課題

ボランティア登録者に対して文大ボランティアひろばへの参加者が少ないため、令和５年度は参加者を増やせるよう周知方法を工夫し取り組んでいきたい。

（文責：事務局）

Ⅳ－４．地域交流研究センターサテライト

1. 地域交流研究センターサテライトについて

平成 25 年度に都留市まちづくり交流センター内に設置された都留文科大学地域交流研究センターのサテライト（分室）である。サテライトでは地域の方々により大学を身近に感じてもらうことや、大学と市民との交流促進を図ることを目的に活動している。

2. 令和４年度の活動状況

サテライトの主な活動は、大学と地域をつなぐ窓口として、ボランティアの募集や地域の講演会への講師派遣依頼、学生のイベント開催の支援などである。令和４年度の主な活動は、以下の通りである。

・はつらつ鶴寿大学ボランティアスタッフ募集
・「健全育成シリーズ」編集委員への出席と執筆の依頼
（地域交流研究センター長 北垣憲仁、学校教育学科教授 西本勝美）
・都留市俳句連盟と学生との市民交流会「俳句にふれてみよう」の企画・運営
・都留市神楽保存会連盟が所有する神楽写真を都留文科大学附属図書館にて展示する「神楽写真展」の企画
・暮らしに役立つみんなの広場
ボードゲームサークル策士…7 月 17 日、12 月 17 日 「大学生とボードゲームで遊ぼう！」
落語研究会…9 月 24 日、3 月 26 日 「落語研究会 まち交寄席」
かるたサークルあまつかぜ…11 月 19 日 「大学生とかるたで交流しよう！」
文藝研究会…9 月 17 日「読書感想文の書き方を教わろう！」（コロナウイルス感染拡大防止のため中止）、12 月 3 日同企画（申し込みがなかったため中止）
・ゲストハウスゆかりと協同で行うイベントの企画

コロナ禍に少し落ち着きが見えた令和４年度は、サテライトに新たな相談を持ってきてくださる地域の方が多くいらっしゃった。また、一時休止していた暮らしに役立つみんなの広場も再開できるようになった。

「神楽写真展」は、都留市の素晴らしい文化について大学生に知ってほしい、興味を持った学生に八朔祭に参加してほしいという都留市神楽保存会連盟からの相談により実現した。都留市内で神楽が保存されている場所を示した神社マップや A3 サイズの神楽写真 48 枚と旗の展示を行った。入口付近の展示スペースで実施したため、図書館へ訪れた学生がしばしば足を止める様子が見られた。

都留市俳句連盟主催で行った市民交流会「俳句にふれてみよう」は、サテライトという地域と大学を結ぶ機関を通して学生と交流する機会を設けられないかという相談から始まった。打ち合わせを重ねるなかで、都留市俳句連盟の方々は都留市の俳句文化を継承するため、大学生に俳句への興味を少しでも持ってほしいという願いを強く持っていることがわかった。しかし学生が参加したいと思うような内容にするためには熟考する必要があり、現役の学生や本学講師にもご協力いただき、今の学生の考えというものを生の声として俳句連盟の方々に聞いてもらう機会を設けながら内容を練っていった。最終的に、俳句の講座という形ではなく俳句の面白さに気付けて俳句に興味を持つきっかけになるような内容で行った。当日の様子はとても和やかで、俳句連盟の方々にとっても学生にとっても新鮮な驚きや発見の

ある話ができたようだった。実施後に行ったアンケートでは、「俳句のおもしろさにふれられて良かった」「今まで地域の方と交流する機会がなかったので楽しかった」「また参加したい」という意見が見られ、初めて行ったイベントとしては良い形になったのではないだろうか。俳句連盟の方々は、「今後も続けてどんどん参加人数を増やし、ゆくゆくは大学に俳句サークルがうまれると嬉しい」とおっしゃっていた。

公民館事業の「暮らしに役立つみんなの広場」においては、本学学生サークルを講師として依頼し、計5回の開催をすることができた。しかし、9月と12月に実施を試みた文藝研究会の「読書感想文の書き方を教わろう！」はそれぞれ、コロナウイルス感染拡大防止のためと参加申し込みがなかったために開催を中止した。計画したイベントが中止となってしまったことは残念だったが、一度途絶えてしまった「暮らしに役立つみんなの広場」を通した学生とのつながりがまた増えたことは嬉しいことである。学生と打ち合わせを行うなかで、「まちづくり交流センターに初めて足を運ぶ」「サークルが新体制になってからこれが初めての外部依頼」という声も多く聞かれたため、参加して良かったと言ってくださった地域の方々だけでなく学生にとっても実りある機会となったのであれば良かった。

3. 令和5年度の活動について

令和5年度は、令和4年度から新しく始めた都留市俳句連盟との市民交流会や計画中のゲストハウスゆかりとの協賛イベントなどを今後も続けて、どんどん規模が大きくなるようなものにしたい。

まちづくり交流センターという場所をもっと学生が利用しやすい場所にすること、サテライトという機関がもっと学生に浸透して何か地域と関わることがしたいと考えている学生のお手伝いができる機関として大きくなることを目標としたい。そのためには、「暮らしに役立つみんなの広場」での講師依頼を幅広いサークルに行う、地域交流が行うイベントにサテライトが参加し学生とのつながりをつくるといったことも重要になると考える。

また、地域の方々にはまだまだサテライトという機関が浸透していないこと、サテライトの存在を知っていて相談しても具体的に何をしてほしいのかが決まっていないこと、を実感した。例えば「学生と交流してみたい」という声は多くいただいたが、どのようなことをして交流したいのかが決まっておらずサテライトとしてはどう動くべきなのか難しいところがあった。また、地域の方は学生に自分の得意なことを教えたいと思っていても、実際の学生は自分が興味のあること以外には意欲的に参加しない様子が見受けられるため、集客が難しいということもある。地域の方の「何かをやってみたい」という意思と、学生のリアルな現状との双方に折り合いをつけ、どのようにすれば実施可能な企画として成立するかを考える必要がある。

（文責：事務局）

Ⅳ－５.「学級づくりの向上をめざす実践講座」活動報告

令和４年度は、５月から 11 月まで全６回の講座を開催した。

第１回　５月 28 日（土）　渡辺幸之助（武蔵野大学特任教授）
　　学級づくりの基礎基本から、主権者教育の最前線につなげる

第２回　６月 25 日（土）　金勝武鑑（中学校時間講師）
　　幾度も問い直し立ち返る、教師の「原点」とは何か

第３回　７月 23 日（土）　染矢晋太郎（上野原西中学校教諭）
　　教師のボキャブラリーでつくり出す、育て合う言葉に満ちた教室

第４回　９月 24 日（土）　細越真梨子（上野原小学校教諭）
　　主体性こそ自分らしさ！～安心して受け止め合える学級への挑戦

第５回　10 月 22 日（土）　藤森啓太（泉小学校教諭）
　　「学びのホンモノ化」で教師と子どもが共に目指す市民性

第６回　11 月 12 日（土）　渡邉恭子（勝山中学校教諭）
　　叱る、褒める、認める　個人と集団のモチベーションを引き出す

令和４年度は、参加者が 40 名を超える回もあり、県内の小中高の教員、本学の学生が、学級づくりの具体的な方法について考え、情報交換をする場となった。各回、講師から示される魅力的な実践記録をもとに参加者同士での活発な議論が交わされ、充実した講座内容となった。

令和５年度は、６回にわたって開催される予定である。

①第１回　５月２７日(土)　渡辺幸之助（武蔵野大学特任教授）
　学級づくりの面白さと心躍る行事の意味～日本型教育とは何か

②第２回　６月２４日(土)　渡邉恭子（勝山中学校教諭）
　学級づくりを仲立ちに教員同士が学び合う、そのための記録を！

③第３回　７月２２日(土)　足達亮祐（双葉西小学校教諭）
　小学校低学年からの話し合い・班編制・リーダー育成を楽しむ

④第４回　９月３０日(土)　梶原みのり（忍野小学校教諭）
　教師が変わる、子どもが変わる、特支教育から得た発想を活かす

⑤第５回　10 月２８日(土)　今泉教秋（元八代小学校校長）
　子どもたちの言葉から何を学ぶか～実践を元に学び合った日々

⑥第６回　11 月１８日(土)　清水英理華（双葉西小学校教諭）
　自分らしく生き生きと、自分の言葉で語れる小学１年生！

（文責：邊見信）

Ⅳ－6．市民公開講座

地域交流研究センターの部門活動として実施したものはⅡ．各部門の活動で、また現職教員教育講座と子ども公開講座についてはⅢ．インターフェイスとメディアの活動において報告したため、ここではそれ以外のものについて報告する。

○市民公開講座　文大名画座「セロ弾きのゴーシュ」上映会

【日程・会場等】

日　時：令和4年7月29日（金）18：30～20：30
会　場：2号館101教室　参加者：41名
講　師：吉田恵理（国文学科講師）

【講座の概要】

令和4年7月29日（金）、文大名画座を開催した。今回上映したのは原作・宮澤賢治、監督・高畑勲によるアニメーション映画「セロ弾きのゴーシュ」（1982）である。高畑は「子供の頃本を読んだとき、不思議なその有様がありありと目に浮かび、胸をときめかせた思い出」（『アニメーション、折にふれて』岩波書店、2019）が動因となってアニメーションの世界へと引き寄せられた体験とともに、文学を映像化することがいかなる難問に立ち向かうことであるか、その「恐ろしい作業」について語っている。本作はその高畑がとりわけ映像化困難と云われる宮澤賢治の「イーハトーヴォ」の世界に挑戦し、キャラクター・デザイン、美術、音楽にこだわり抜いて五年の歳月をかけて制作した恐るべき作品である。

上映前には宮澤賢治と高畑勲の略歴や上記のような高畑の言説を紹介し、原作との比較の観点から見どころを導入として示し、上映後に解説を行った。特に強調したのは、奇跡の音楽映画と云われる本作の音楽表現と原作の文学表現の違いである。

一般・本学学生合わせて41名の参加があり、金曜の夕方という時間帯であったにもかかわらず親子連れの参加もあったのは喜ばしいことであった。土日の開催ならもう少し一般の参加も見込めたかもしれない。上映後のアンケートでは、「原作と映像の表現の違いが面白かった」、「作品理解を深めてから映画を観ることができてよかった」、「自然の風景と音楽をたっぷり味わうことができてとても楽しかった」などの感想が寄せられた。

（文責：吉田恵理）

○市民公開講座「佐野夢加 かけっこ教室」

【日程・会場等】

日　時：令和4年7月24日（土）9:30～11:30
会　場：都留文科大学体育館　　参加者：19名
講　師：佐野夢加（本学特任講師）

【講座の概要】

7月24日（土）、都留市内の小学生を対象とした市民公開講座「佐野夢加かけっこ教室」を開催した。

本講座は、本学特任講師でロンドン五輪陸上競技日本代表の佐野夢加氏を講師に迎えて、平成 28 年度から毎年開催しているもので、今回は本学陸上部の学生 2 名が補助として参加した。

参加者は小学校 1 年生から 3 年生までの親子 9 組 19 名で、スキップやマーカーを使い、走りの向上につなげるとともに、簡単なゲームをしながら走ることの楽しさを感じてもらう練習を行った。

【参加者の感想】

・場所が広くて体を動かすのが気持ちよかった。(1年男子)
・姿勢、手の握り方、体重のかける場所、楽しく遊べました！家でも楽しんでかけっこやろうと思います！(保護者)
・とても楽しかったです。ありがとうございました。(2 年女子)・たのしかった。(1 年女子)
・子供がいきいきとかけ足をする事を体験する機会はとても良いと思います。学校での走ることとは違う環境で学べることが楽しかったようです。(1 年男子保護者)
・スキップができるようになりました。(保護者) 走る楽しさがわかりました。(3 年生男子)
・基本的な動きが学べてよかったです。子どもに正しい走り方を教えていきたいです。(1年男子保護者)
・色々なスキップが良かったです。じゃんけんと走ることを組み合わせたのは子供も楽しめるので良かったです。(2 年女子保護者)
・遊びながら、走り方が学べたので、よかったです。(1・3 年生保護者)
・子供と一緒に体育館で運動することは、滅多にないことなので、とても貴重な体験ができました。子供もすごく喜んでいたので参加して良かったと思います。(1年男子保護者)

(文責：事務局)

○市民公開講座「英語であそぼう！」

【日程・会場等】

日　時：令和 4 年 10 月 22 日（土）10:00 ～ 11:00
会　場：3 号館 4 階　　参加者：9 名
講　師：上原（かんばる）明子（学校教育学科教授）

【講座の概要】

都留市の放課後子ども教室との連携による「子ども公開講座」より発展。放課後子ども教室に登録している小学生だけでなく、都留市内の全小学生を対象にするために、市民公開講座で開催することにした。英語を使ったゲームやクイズなどを用いて、英語に楽しく触れ合える講座として開催している。

【参加者の感想】

・世界の食べ物の出身地がよく分かった。(6 年女子)
・楽しかった。(4 年女子)
・ご飯が食べれなかった。(3 年)
・えいごがもっとたのしくなりました。(1年女子)

(文責：事務局)

Ⅴ．地域交流研究教育プロジェクト

Ⅴ－１．「食育つる推進プラン」

【目的】

都留市が第 6 次都留市長期総合計画で策定している「健康増進計画･食育推進計画」（2016 ～ 2026 年）の重点目標「健康プロジェクト TSURU つる」（旧「食育つる推進プラン」）１～９に基づき、主に最優先課題とされている１．栄養・食育分野について、学内における学生や地域の人々への食育の周知や活動の支援を大学生が積極的に取り組み、健康増進と食生活の意識改善に取り組むことを検討することを目的とする。

【概要】

都留市食育推進計画の分野別目標である（１）食に関する正しい知識の普及と健全な食習慣を実践（２）食の大切さを理解し感謝の気持ちを育成（３）地産地消の推進と食文化の継承を普及、に基づき、本学学生が市役所や食生活改善推進員の方々にご指導をいただきながら、①大学生向けの減塩・防災料理教室　②のびのび興譲館クッキング塾での料理教室　③市内保育園への食育教室等に取り組んでいる。

【2022 年度の報告】

コロナの影響により、①大学生向けの減塩・防災料理教室　③市内保育園への食育教室は見送りとなった。②のびのび興譲館クッキング塾での料理教室は 2022 年 11 ～ 12 月に実施されたため、その報告を以下に記載する。

「のびのび興譲館クッキング塾」の参加

日　　時：2022 年 11 月 26 日（土）、12 月 10 日（土）
場　　所：いきいきプラザ都留　調理実習室
対　　象：塾生（都留市内小学４～６年生）
参加人数：計 20 名（小学生各回 10 名、本学学生 2 名、市役所 2 名）
内　　容：「のびのび興譲館クッキング塾」は、市教育委員会主催の小学生を対象とした料理教室である。毎月 1 回、主に食生活改善推進員の方や調理師の方を講師として招き、様々な調理を経験することができるため、小学生に人気の教室となっている。活動内容としては、単に調理の技術や知識を伝えるだけでなく、地元都留市で作られている作物を知ることや、昔からの食文化に触れることなど、多くの食経験を取り入れている。これらの経験を通して、生きていく上で最も基本となる「食」について、子どものうちから関心を深め、生涯にわたって健康で豊な食生活を実践できる人間を育てることを目標としている。この主旨を踏まえ、年間活動計画のうち、第 5 回を生活環境科学系ゼミ生が担当した。

2022 年度は、コロナの影響により密を避けるため、2 日間での実施となった。内容は、郷土料理を作ってみようという実習で、山形県の郷土料理である、どんどん焼き・玉こんにゃく・芋煮・だしを調理した。小学生にとっては初めて聞く名前の料理が殆どで、最初はうまく作ることができるか緊張した様子であったが、大学生に教えてもらいながら楽しみながら実習を体験することが出来た。

＜ 2023 年度の予定＞

2023 年度は、現段階での実施予定はのびのび興譲館クッキング塾のみとなっているが、コロナの状況も落ち着いてきたため、他の実践の取り組みも再開したいと考えている。

（文責：平和香子）

付）2022 年度（令和 4 年度）　地域交流研究センター担当教員

北垣　憲仁	地域交流研究センター教授	地域交流研究センター長 自然共生研究部門担当
別宮有紀子	学校教育学科教授	地域交流研究センター副センター長 自然共生研究部門担当
内山美惠子	学校教育学科教授	自然共生研究部門担当
福島　万紀	地域社会学科講師	自然共生研究部門担当
山森　美穂	学校教育学科教授	自然共生研究部門担当
吉岡　卓	学校教育学科准教授	共通教育研究部門（地域情報教育）担当
野中　潤	国文学科教授	共通教育研究部門（地域情報教育）担当
日向　良和	共通教育センター教授	共通教育研究部門（地域情報教育）担当
青木　宏希	地域交流研究センター特任教授	共生教育研究部門（地域美術教育）担当
山本　直紀	学校教育学科特任教授	共生教育研究部門（地域美術教育）担当
堤　　英俊	学校教育学科准教授	共生教育研究部門 （地域インクルーシブ教育）担当
佐藤比呂二	学校教育学科特任教授	共生教育研究部門 （地域インクルーシブ教育）担当
山本　　剛	学校教育学科特任教授	共生教育研究部門 （地域インクルーシブ教育）担当
邊見　　信	学校教育学科講師	共生教育研究部門（社会教育）担当
冨永　貴公	地域社会学科准教授	共生教育研究部門（社会教育）担当
吉田　恵理	国文学科講師	共生教育研究部門（社会教育）担当
佐野　夢加	地域交流研究センター特任講師	共生教育研究部門（社会教育）担当
鈴木　健大	地域社会学科准教授	まちづくり研究部門担当
原　　和久	国際教育学科教授	グローカル交流研究部門
事務局：深澤祥邦　杉本涼　渡邉愛美　大川瑠捺（まちづくり交流センター・サテライト）		

2022 年度（令和 4 年度）　地域交流研究センター運営委員会委員

鈴木　健大　　広報委員長
内山美惠子　　学校教育学科
吉田　恵理　　国文学科
OLAGBOYEGA,Kolawole Waziri　英文学科
福島　万紀　　地域社会学科
上野　貴彦　　比較文化学科
Nordström, Johan Karl　国際教育学科
小澤　初美　　経営企画課長
久保田国雄　　市民代表（まちづくり市民活動支援センター長）

2023年11月20日　　発　行

編　集　者　　都留文科大学地域交流研究センター

発　行　者　　都留文科大学
〒402-8555　山梨県都留市田原 3-8-1
電　話　　0554-43-4341（代）

印　刷　所　　株式会社　佐野印刷
〒402-0052　山梨県都留市中央 2-7-3
電　話　　0554-43-1611